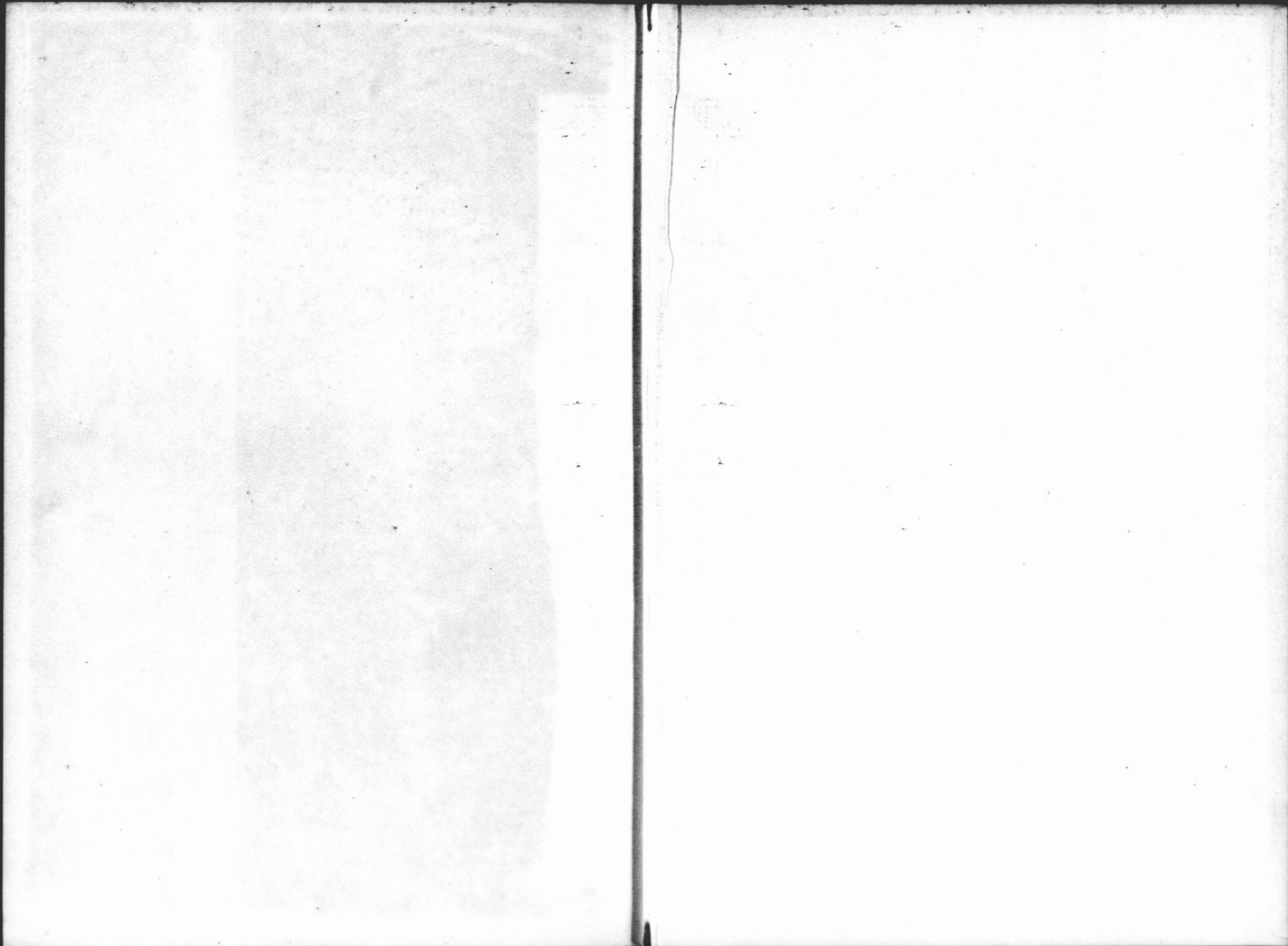
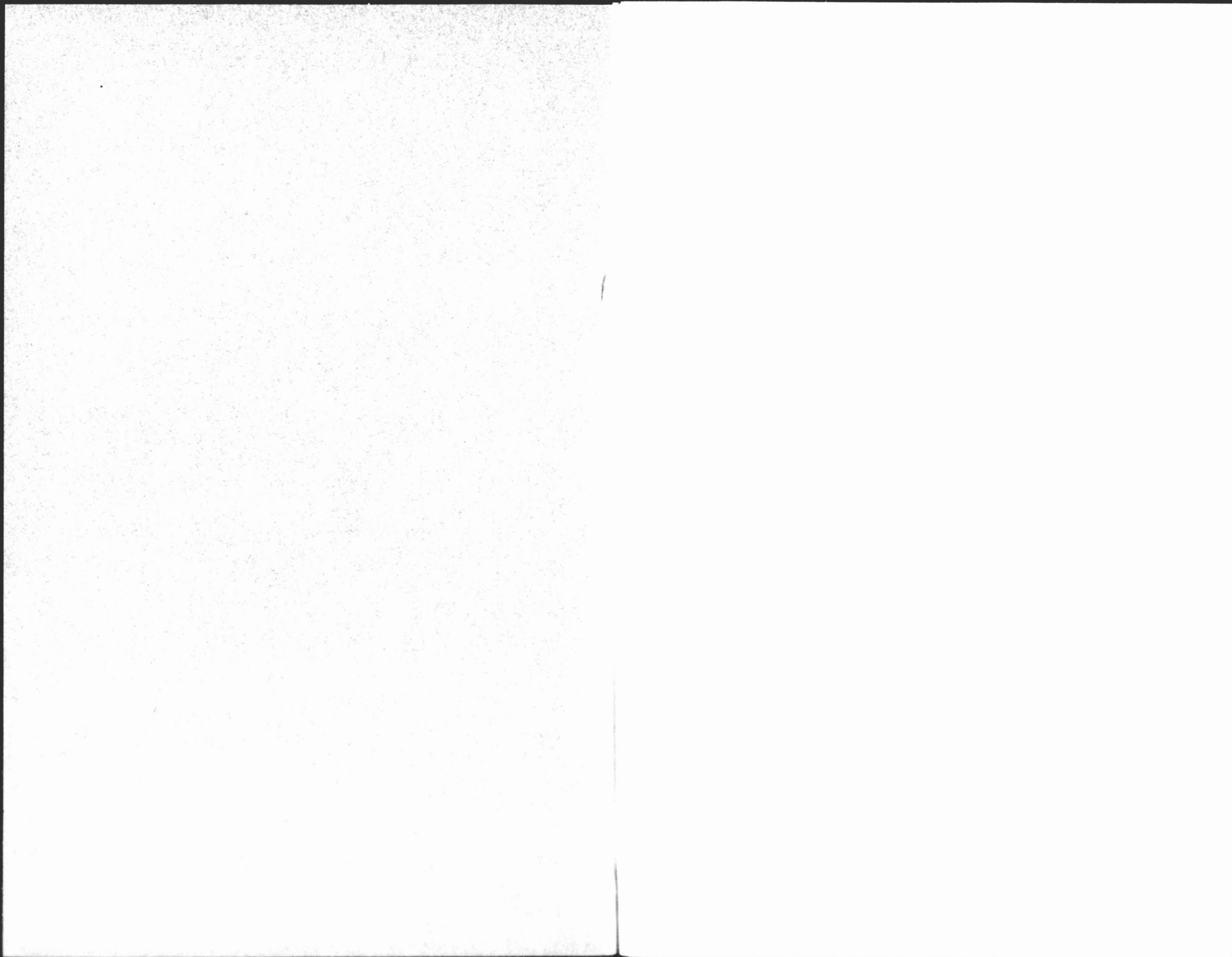


370  
2  
95





國民精神文化文獻 一二

日本教育史資料書 第四輯

國民精神文化研究所

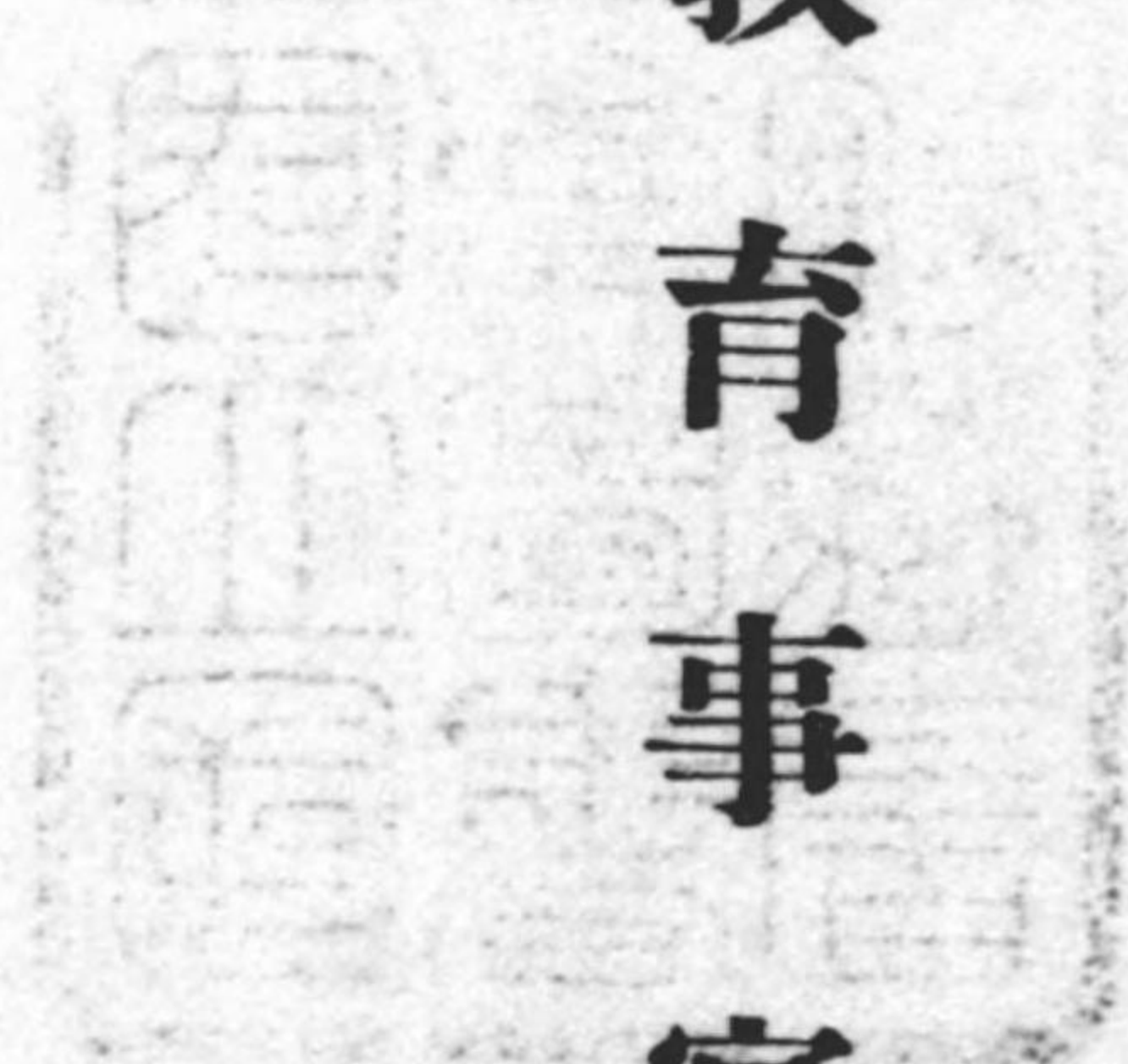
370  
95



121567

教育事實史資料

第五編 近世下



121567

## 例言

一、本書は日本教育に關する歴史的資料を蒐集、整理せるものであつて、その中本年度に刊行せる第一輯より第五輯までは教育事實史資料とし、次いで公にすべき教育思想史資料と相俟つて、専門學校、師範學校、其の他教育史教授の參考書たらしめんとするものである。

一、教育事實史に關する資料の蒐集、整理に際しては、まづ社會形態、思想形態の變遷に應じて、時代的區劃を上古、中古、中世、近世上、近世下、最近世の六部に分ち、各時代の資料を各々一編に纏めた。本書は最初に我が國肇國の理想を明かならしむべき資料を掲げ、最後に我が國教學の根本方針を明瞭にすべき資料を以つて結んだのであるが、それ以外には各編ごとその時代の社會形態、思想形態、教化政策に關する資料を「教育の形態」とし、これを最初に置き、それに「教育の理想」、「教育の施設」、「教育の内容」、「教育の方法」といふ項目に従つて各項各一章となし、各編の資料をその順序に配列した。更に各章の内部に於いても、資料は項目に依つて分類し、同一項目内に於いては年代順に配列した。

一、各章の終にある解説は、蒐集せる資料の説明として附したものであるが、同時に成るべくその敘述を通して日本教育事實史の簡単な概観を得しむるやうにした。各資料中難解な語句には簡単な語釋を施し、漢文には句讀訓點を附した。異本に依つて異なる字句は、その中適當と編者の思惟したるものを採用し、原資料に用ゐられてゐる古字、俗字、略字等は、原則として現行文字に改めた。各資料には使用の爲の便を計つて、上古より最近世に至るまで通し番號を附し、解説文にもこれを挿入して、對應に便ならしめた。

一、本年度に刊行せる第一輯より第五輯までの編纂は、研究部長研究囑託吉田熊次監修の下に、所員伏見猛彌、助手渡邊誠、思想調査囑託藤田勳、編輯事務囑託平塚益徳並に編纂囑託東京帝國大學助教授海後宗臣之に當つた。

一、第四輯の資料の選擇は編纂者の外、囑託石川謙之を擔當した。本輯の解説は海後宗臣、伏見猛彌、渡邊誠、平塚益徳、校正は藤田勳之に當り、資料の語釋並に校合は、編纂者の外、編輯事務囑託太田兵三郎、同三宅清、同青柳秋生、同田中久夫、同植松茂並に囑託石川謙之を擔當した。

一、第四輯の資料は左記の書を原典とし、他書を參照して校合した。

會津孝子傳 (日本教育文庫)

縣居誓詞 (昭和七年刊賀茂眞淵全集)

あすか川 (國書刊行會刊新燕石十種)

猪飼敬所書簡 (日本儒林叢書)

生玉心中 (日本名著全集近松名作集)

維新前後津和野藩士奉公事蹟 (明治三十三年刊)

維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書

(明治二十五年刊)

一話一言 (日本隨筆大成)

伊波傳毛乃記 (國書刊行會刊新燕石十種)

上坂文書 (史料編纂所藏寫本)

植崎九八郎上書 (日本經濟大典)

浮世風呂呂 (日本名著全集滑稽本集)

雲萍雜志 (岩波文庫)

越後國岩船郡某村五人組帳 (穗積陳重編五人組法規集)

越後國頸城郡上板倉郷棚田村五人組帳

(穗積陳重編五人組法規集)

江戸愚俗徒然嘶 (未刊隨筆百種)

大阪商業習慣錄 (國書刊行會刊徳川時代商業叢書)

大原幽學書簡 (田尻稻次郎編幽學全書)

翁草 (日本隨筆大成)

長部村名主見習良左衛門書簡 (田尻稻次郎編幽學全書)

和庵雜編 (昭和九年刊國學者傳記集成)

改正古狀揃抄 (文化三年刊)

海西漫錄 (國書刊行會刊百家隨筆)

街談文々集要 (續隨筆文學選集)

懷徳堂壁書 (西村時彦著懷徳堂考)

海錄 (國書刊行會刊)

夏山閑話 (日本隨筆全集)

假名世説 (日本隨筆全集)

假名文章娘節用 (日本名著全集人情本集)

上河洪水制定書 (石川謙氏藏寫本)

寬天見聞記 (近古文藝溫知叢書)

寬保延享江府風俗志 (國書刊行會刊近世風俗見聞集)

きゝのまに〜 (未刊隨筆百種)  
 笈埃隨筆 (日本隨筆大成)  
 鳩翁道話 (岩波文庫)  
 嬉遊笑覽 (明治二十九年刊)  
 業要集 (未刊隨筆百種)  
 享保通鑑 (未刊隨筆百種)  
 近世三十六家集略傳 (河喜多直彥編)  
 近世物之本江戸作者部類 (近古文藝溫知叢書)  
 久世條教 (寛政十一年刊)  
 經濟問答秘錄 (日本經濟大典)  
 經濟濟錄 (日本經濟大典)  
 傾城酒吞童子 (日本名著全集近松名作集)  
 慶長以來國學家略傳 (明治三十三年刊)  
 戲作六家撰 (國書刊行會刊燕石十種)  
 見聞集 (改定史籍集覽)  
 嚴有院殿御實紀 (新訂增補國史大系徳川實紀)  
 上野人物志 (大正十三年刊)

古學小傳 (明治十九年刊)  
 御趣法願向被仰渡書並證文控帳 (二宮尊徳全集)  
 五條施教 (文化二年刊)  
 御料書五人組前書 (穂積陳重編五人組法規集)  
 西鶴織留 (日本名著全集西鶴名作集)  
 さへづり草むしの夢 (明治四十三年刊)  
 笹舎學則 (帝國圖書館藏寫本)  
 笹山梅菴寺子制誨之式目 (木版刊本筆道稽古早學問)  
 指面草 (日本名著全集滑稽本集)  
 雜交苦口記 (未刊隨筆百種)  
 五月雨草紙 (國書刊行會刊新燕石十種)  
 七偏人 (日本名著全集滑稽本集)  
 舍用留書 (石川謙氏藏寫本)  
 脩正舍記錄 (石川謙氏藏寫本)  
 主從日用條目 (弘化二年刊本)  
 惇信院殿御實紀 (新訂增補國史大系徳川實紀)  
 浚明院殿御實紀 (新訂增補國史大系徳川實紀)

常憲院殿御實紀 (新訂增補國史大系徳川實紀)  
 松香私志 (明治三十五年刊)  
 莊内二郡五人組控帳 (木版刊本)  
 小兒必用養育草 (日本教育文庫)  
 商人生業鑑 (日本經濟大典)  
 昇平夜話 (日本經濟大典)  
 絲亂記 (國書刊行會刊徳川時代商業叢書)  
 杉谷祐三郎寺子屋掟 (乙竹岩造著日本庶民教育史)  
 政談 (日本經濟大典)  
 世間子息氣質 (日本名著全集浮世草子集)  
 世間娘容氣 (日本名著全集浮世草子集)  
 世間胸算用 (日本名著全集西鶴名作集)  
 世事見聞錄 (改造文庫)  
 全樂堂日録 (國書刊行會刊近世文藝叢書)  
 增訂武江年表 (國書刊行會刊)  
 台徳院殿御實紀 (新訂增補國史大系徳川實紀)  
 大猷院殿御實紀 (新訂增補國史大系徳川實紀)

他我身の上 (國書刊行會刊近世文藝叢書)  
 橋曙覽全集 (明治三十六年刊)  
 玉かつま (明治三十五年刊本居宣長全集)  
 兒讀古狀摘證註 (天保四年刊)  
 町人考見録 (國書刊行會刊徳川時代商業叢書)  
 町人囊 (日本經濟大典)  
 塵塚談 (近古文藝溫知叢書)  
 寺子屋物語 (乙竹岩造氏藏寫本)  
 出羽國田川郡中川通藤島組拾六箇村御仕置五人組帳  
 (穂積陳重編五人組法規集)  
 奠陰集 (明治四十四年刊)  
 天保新政録 (未刊隨筆百種)  
 東海道中膝栗毛 (日本名著全集)  
 東照宮御實紀 (新訂增補國史大系徳川實紀)  
 當世阿多福假面 (日本名著全集滑稽本集)  
 當世杜選商 (安永七年刊)  
 當世宗匠氣質 (帝國文庫氣質全集)



東都歳事記(明治二十六年刊)

鬼園小説(吉川弘文館刊百家説林)

徳川禁令考(吉川弘文館刊)

なるの日並(國書刊行會刊新燕石十種)

中澤道二書簡(石川謙氏藏寫本)

浪花の風(近古文藝溫知叢書)

日本教育史資料(文部省藏版)

日本永代藏(日本名著全集西鶴名作集)

日本新永代藏(日本名著全集浮世草子集)

年山紀聞(吉川弘文館刊百家説林)

梅翁隨筆(日本隨筆大成)

泊船集(俳諧叢書芭蕉翁全集)

波部六兵衛書簡(石川謙氏藏寫本)

原野學問所之事(日本倫理彙編)

肥後物語(日本經濟大典)

百姓(日本經濟大典)

平賀鳩溪實記(近古文藝溫知叢書)

弘之自傳(大正二年刊)

風流夢浮橋(國書刊行會刊徳川文藝類聚)

武家義理物語(岩波文庫)

藤田吉龍講談觸書(石川謙氏藏)

武州多摩郡上谷保村五人組御改帳

(穂積陳重編五人組法規集)

武州多摩郡乘願寺村五人組帳前書

(穂積陳重編五人組法規集)

武備和訓(日本教育文庫)

文化祕筆(未刊隨筆百種)

文恭院殿御實紀(新訂増補國史大系續徳川實紀)

文昭院殿御實紀(新訂増補國史大系徳川實紀)

兵制新書(日本經濟大典)

北條玄養書簡(石川謙氏藏寫本)

報徳記(報徳要典)

寶曆現來集(國書刊行會刊近世風俗見聞集)

本朝櫻陰比事(日本名著全集西鶴名作集)

本朝世事談綺(日本隨筆大成)

本朝二十不孝(日本名著全集西鶴名作集)

眞佐喜のかつら(未刊隨筆百種)

松屋叢話(近古文藝溫知叢書)

松屋筆記(國書刊行會刊)

松本孝子傳(日本教育文庫)

窓の須佐美(近古文藝溫知叢書)

三幣又左衛門書簡(石川謙氏藏寫本)

妙々奇談(近古文藝溫知叢書)

民間省要(日本經濟大典)

村井由清書簡(石川謙氏藏寫本)

明良洪範(國書刊行會刊)

本居内遠門人録(昭和三年刊本居全集)

本居宣長在京日記(本居宣長稿本全集)

本居宣長日記(本居宣長稿本全集)

野叟獨語(近古文藝溫知叢書)

破レ家ノツバクリ話(日本經濟大典)

山鹿語類(國書刊行會刊)

山崎與次兵衛壽の門松(日本名著全集近松名作集)

山本大膳五人組帳諭告文(穂積陳重編五人組法規集)

鐘の權三重帷子(日本名著全集近松名作集)

有徳院殿御實紀(新訂増補國史大系徳川實紀)

右文故事(國書刊行會刊近藤正齋全集)

用捨箱(天保十二年刊)

擁書樓日記(國書刊行會刊近世文藝叢書)

吉田松陰女訓(日本教育文庫)

無由言(昭和四年刊鳩翁遺稿)

慶喜公御實紀(新訂増補國史大系續徳川實紀)

米澤藩伍什組合掟書(穂積陳重編五人組法規集)

萬の文反古(日本名著全集西鶴名作集)

蘭學階梯(國書刊行會刊文明源流叢書)

蘭學事始(國書刊行會刊文明源流叢書)

我衣(近古文藝溫知叢書)

わすれのこり(國書刊行會刊續燕石十種)

昭和十二年三月

國民精神文化研究所

# 日本教育史資料書 第四輯 目次

## 第五編 近世 下

### 第一章 教育の形態

資料〔一六四九〕—〔一七四七〕……………一  
解説……………七

### 第二章 教育の理想

資料〔一七四八〕—〔一七七〇〕……………一七  
解説……………二〇

### 第三章 教育の施設

資料〔一七七二〕—〔一九〇一〕……………二六  
解説……………二四〇

### 第四章 教育の内容

資料〔一九〇二〕—〔一九八六〕……………二四六  
解説……………三〇七

第五章 教育の方法

資料〔一九八七〕—〔二〇六七〕……………三二

解説……………三七

第五編 近世下

第一章 教育の形態

〔一六四九〕上坂文書

- 一、辻切すり、盜賊之儀付而、諸奉公人侍者五人組、下人は十人組に連判を續  
右惡逆不可仕旨、請乞可申事、
- 一、侍五人、下々拾人より内のものは、有次第くみたるべき事、

(註) 慶長二年三月七日の掟書第一條及び第二條

〔一六五〇〕大猷院殿御實紀  
卷三十六

けふ武藏、相模、伊豆、上總、下總、安房、上野、下野、常陸、甲斐、信濃國の代官、地頭に

仰下されしは、前令のごとく五人組いよく心いれ改むべし、在々處々に不頼のものなからんやう、一郷かぎりにはかりあひ常に之を査檢しもし悪徒あらば査覈のうへ、五人組はさらなり、そのさまにより郷中のもの等迄曲事たるべし、不審のものに宿貸すべからず、もししらずしてかし、あやしげなる事あらば、たとひ親戚たりといふとも、すみやかに里正、五人組迄有のまゝに申出べし、公私領ともあるは新田及び郷中に移り來るものあるときは、本の出處を改め、たしかなるものにをいては居住せしむべし、郷中より奴婢に出るか、または賣買の爲他行するとも、その行先を里正、五人組に告ておもむかしむべし、各所にて賊徒并に奸猾のものあらば、すみやかにうたへ出べし、たとひ黨與たりといふとも、其科をゆるし褒賜あるべし、もしかくしをき他より發顯せば、査檢のうへ五人組はいふ迄もなし、里正迄も曲事たるべし、

(註) 寛永十四年十月廿六日の條

〔二六五一〕殿有院殿御實紀 卷十

市井年寄、五人組と相はからず、心のまゝに事はからふものは曲事たるべし、但年寄非義あらば、閭郷より訴狀をさゝぐべし、査檢ありて嚴譴せらるべし、

(註) 明暦元年十月十三日の條

〔二六五二〕殿有院殿御實紀 卷十七

萬石以上以下の輩に仰下さるゝは、天主教の事、いまなをひそかにその教を奉ずるものあるよし聞れば、家士、奴僕に至るまで、常にをこたりなくさとすべし、奴僕をかゝへかふる時、こゝろ入て保人をえらび、宗旨を査檢しめしかゝゆべし、農商は五人組いよいよその香華院をたゞし、不審の宗旨あらば査檢をとぐべし、明暦元年八月に建し制禁の高札、星霜を経て文字見えわかるまじければ、新に改書してたつべしとなり

(註) 萬治二年六月廿三日の條

〔一六五三〕嚴有院殿御實紀 卷三十三

すべて獨居の農夫病にかゝらば、五人組はいふまでもなし、闔村相たすけ耕耨し、産業を遂しめ、租税をおさめしむべし。

(註) 寛文六年十一月十一日の條

〔一六五四〕徳川禁令考 卷四十三

年貢不濟内借金米爲返濟他所江穀物等少も不可出之若年貢引負致百姓缺落仕候は年貢は五人組又村中として皆濟仕其上百姓可尋出事

(註) 寛文六年十一月十一日「關東御領所下知狀」第二十八條

〔一六五五〕常憲院殿御實紀 卷八

借家するものも、五人組を定め互に檢點し、心得ぬものあらば、里正、家主へ此むね告べし、隠しをかばとがめらるべし、里正、家主うけがはずば、奉行廳にうたへ出べし、市井の梳剃并に乞丐までも査檢し、もし心得ぬものあらば、市井よりうたへ出べし、見のがしなば、とがめ蒙るべしとなり、

(註) 天和三年九月の條

〔一六五六〕徳川禁令考 卷四十三

一 御料并私領百姓之事其代官領主依有非分所を立退候付而は縱其主より相届候とても猥に不可歸付事  
一 年貢未進等有之者隣郷之取を以於奉行所互に出入令勘定相濟候上何方に成共可居住事  
一 御代官衆之儀非分於有之は届なしに直目安可申上事  
一 百姓をむさと殺候事御停止たり縱雖有科擲捕之於奉行所對決之上可

申付事

(註) 慶長八年三月廿七日「諸國鄉村掟」第一條、第二條、第六條、第七條

〔一六五七〕莊内二郡五人組掟帳

五人組之儀町場は家並在郷は向寄次第家五軒宛組合せ組頭可立之五組に長人壹人可申付借家借地之者并水呑寺社門前之者等に至迄五人組合に入へし組にはつれ候もの不可差置但寺社は格別たるへし常々五人組仲間無油斷子弟下人迄御法度之趣堅申付其上いたつら者有之肝煎長人申付をも不用者有之は可訴之若肝煎長人非義有之は不依何事可申出事

(註) 文政元年「庄内二郡五人組掟之條々」第十一條

〔一六五八〕莊内二郡五人組掟帳

照つ、き早魃のとしから村々人々力を合せ水をひき人こと互に計るへ

し持分斗りに精を出し我ま、なる働し他の苗の枯るをもかまはず縦ひ其年の持分は作まし候共其村の守なる鎮守の神のいかてか悪み給はさらむおのつから仕合のよからぬ事なと有へし

(註) 文政二年六月「郷村へ申諭書」第二條の一節

〔一六五九〕莊内二郡五人組掟帳

他所奉公彌以御制禁に候若無據子細有之は其譯申出可請差圖候惣而他所出之義以書付願出可申候若願不申立他所へ罷出後日相知候者可爲曲事之事

附他所出之者願之上に而も五ヶ年に可限事

(註) 文政元年「庄内二郡五人組掟之條々」第三十五條

〔一六六〇〕政談 卷二

昔ハ在々ニ殊ノ外錢拂底ニテ一切ノ物ヲ錢ニテハ不買、皆米麥ニテ買タル事、某田舎ニテ覺タルコト也、近來ノ様子ヲ聞合スルニ、元祿ノ比ヨリ田舎ヘモ錢行渡テ、錢ニテ物ヲ買事ニナリタリ、

〔一六六一〕町人囊

いにしへは百姓より町人は下座なりといへどもいつ比よりか天下金銀づかひとなりて天下の金銀財寶みな町人の方に主どれる事にて、貴人の御前へも召出さるゝ事もあれば、いつとなく其品百姓の上にあるに似たり、況や百年以來は天下靜謐の御代なる故、儒者、醫者、歌道者、茶湯風流の諸藝者、多くは町人の中より出来ることになりぬ、

〔一六六二〕日本新永代藏

げにや君が代の有がたき事は、町人とても金銀次第にて、お大名よりさき

に、時々、の初肴を賞翫仕る事とかくに金徳銀威こそめでたけれ、

〔註〕「鯛は戎の脇指鏝際の商」の條

〔一六六三〕塵塚談

諸商賣に問屋の仲間といふものあり、多分かの上方者也、黨類多くして、世用宜しきに似たれとも、此者共時をはかり申合せ、利潤の便りをなし、諸色の直段を極め、士農のいたみとなり、世のはつらひとなる事多し、淺草札差とももの起立の節は、武士は用辨宜しと悦ひし事ならん、今に至りては、甚しき害となれり、問屋仲間もこれにおなじやうになれり、近歲かくの如きの類多し、武家は人を治め、商人は治めらるゝの法なるに、今は町人が人を治る世のことし、

〔註〕「貧は士の常なる事」の條

〔一六六四〕塵塚談  
下之卷

百姓町人死去し、法名を見るに、士大夫のことし、中古まで農商はいふに及はず、武家へもむさと院號は付さる事なりしに、六七年以來、時世とはいひながら、諸宗の住持た、金銀のみに目が付て、武家農商のわかちもなく、院號を付、俗人へ與ふるなり、後年に至り士大夫も賤民も辨へがたく成こそ口おしき事にあらずや、是みな出家の惡風より起れり、根を斷ち、葉を枯し賜ふの御制禁を願ふ事なり

(註) 「法名に院號を付る事」の條

〔一六六五〕世事見聞錄  
五の卷

諸事此振合にて、武士は囊中軽く、元氣弱く、町人は元氣強く健にして、懷中重く、侍の金壹兩費す所を、町人は二兩、三兩づ、費す故、何れへ參りても其威勢格別にて、皆其方へ偏り、歌連歌俳諧茶の湯師活花師琴三味線曳其外

の遊民も、武士を疎み町人を慕ひ、上下共町人の手を離れて暮されぬものゝ如くなり、殊に小給の侍、徒士、足輕、其以下の者は、奉公の間の内職にて、傘を張、挑灯を張、下駄、足駄の鼻緒を始め種々細工を致し、妻子も共々稼ぎ、町人の蔭にて、餘情を請、渡世のたしに致す事故、終には奉公筋よりも、其引合の町人を旦那の如く心得、身に付たる義理を外になして、金銀の襟に付、世舉て町人を慕ひ、人は武士より町人と成、侍も兎角町家に交り、放埒者は遊藝杯習ひて町人に成り、百姓も、前にいふ如く、何角に付、追々に町家へ出、又百姓の子供は町人に召仕はれ、終に町人に成果れ共、町人の子の百姓に遣るるは壹人もなし、

(註) 「諸町人の事」の條

〔一六六六〕我衣

寛永十六年迄ハ、武家ハ格別、町人百姓トモニ衣服甚龜相ナリ、女モ町人百



姓ノ妻ナレバ順之正保慶安頃迄年々キシニテ輕キ貧家ノ妻娘武家へ奉公ニ出ル次第々々ニ立身シ、上ツ方ノ御服ヲモ拜領シ、我家へ歸テ嫁スニモ右ノ拜領物ヲ着シ、見物遊山祝義ナドニモ一ツ二ツ有ルモノヲ著シタリ、故ニ自ラ世上ノ女子目ヲ奢セ、有徳家ノ妻子等ハ手前金ニテ拜領物ノゴトクコシラヘ著シ、右ノ僮服ヲ忘レタリ、

〔一六六七〕平賀鳩溪實記  
卷之三

當時世上の様子、風俗甚た惰弱にして、萬事手薄く心易き事にて、人の耳目を驚かす世の中也、其上武家町人共に芝居藝者の身ぶり移りて、うはきなる風俗なり、

(註) 「平賀源内工夫之事」の條

〔一六六八〕野叟獨語  
上之卷

世ノ人々モ此餘澤ニテ今日ニ至ル迄何不足ナク、干戈飢寒ノ患ヲ思ハズ、美食ニ飽キ美服ヲ着シ、花奢風流ニ日ヲ送リケル難有事ヲ打ワスレ、代ハ萬代モ如此モノト思ヒ、上ハ貴人ヨリ下方賤民ニ至ル迄、二代モ三代モ安樂ニ暮セシ其天罰ニヤ、近來ハ金錢不足シ世ノ中何トナク手詰ニ成、人々是ヲ塗カクサント思フニ、心底飽迄イヤシクナリ、其所業皆道ニアタラズ、

〔一六六九〕塵塚談  
上之卷

我等十四歳の比は、御家人貳參拾俵高の妻女を、かみ様と皆人稱せり、まして商人は富家にててもかみ様とよび、子どもか親兄へはと、様か、様あに様あね様といひけり、然るに二三十年以來、同心渡り用人の類の妻、町人も相應にくらす者の妻は、御新造様と稱し、又は一日くらしの者の子共も、御と、様御か、様御あに様御あね様といふ事になりたり、いはんや富家と淺草札差は心至り、禮儀武家をまねて、娘をおじやう様、妻を御新造様と稱

す、大名の嫡子の室を、御新造様と稱する事をしらずして、僭上無禮なる事  
悪むへし、世の中奢れるより言語までおごりて、實儀は薄く輕薄になれり、  
諸商人の卑賤の者へも賣物をうり附んとて、あがめうやまふより移り來  
りし事成べし

(註) 「御新造かみさまの事」の條

〔一六七〇〕本朝二十不孝  
卷三

爰に大道筋の南向貳拾七八間、檜木作りの臺格子に二重座の砲釘を打か  
、やき、奥深に豊なる住居見るさへ浦山し、何を世渡り共しれかたし、むか  
し唐へ抛銀して仕合次第分限となつて、今此金銀もふけにくい世の中に  
しまふた屋殿の八五郎といはれぬ、され共二親に不孝と取さたする程の  
事悪人なり、不斷の仕業鹽肴も目にかけて直段をし、計芋も百を何程と數  
讀て買夢にも十露盤を忘れず、錢溜る分別ばかりして、袋町乳森の遊女を

しらず、夷嶋の常芝居見た事もなくて、世帯もちかたむる鑑にもなりぬべ  
き人なり、

(註) 「先斗に置いて來多男」の條

〔一六七一〕山崎與次兵衛壽の門松  
中卷

侍の子は、侍の親が育て、武士の道を教ゆる故に武士となり、町人の子は  
町人の親が育て、商賣の道を教ゆる故に商人となる、侍は利徳を捨て、  
名を求め、町人は名を捨て、利徳を取り、金銀をためる、是が道と申すもの

〔一六七二〕山崎與次兵衛壽の門松  
中卷

何ぼう惜み貯へても死んでは帷子一枚とは、此淨閑も知つたれども、死ぬ  
るまで金銀を神佛と尊ぶ、是が町人の天の道

一六七三 武備和訓  
卷一

或浪人常に町人と友たり、ある時町人客に郷て云、やつがれ書肆たるにより、武家にたち入商賣して畧其風俗を見るに、我今武士とならん事も難からじと、浪客曰、何如ぞや、町人曰、孟軻の給ふ事あり、人恒の産なき時は恒の心なしと、士農工商の家々、常の産あるは武家ばかりにて候へば、常の心あらん事勿論にて候、其以下の三民は皆々恒の心無きものにして、其内わきて拙きは我が商人也、やつがれ其三民の内をつたなきものに生れ、殊更家貧乏にして渡世に困めり、然れども富商をうらやまず、貧人を侮らず、家業に非道の利を求ず候、然に今世武家の上を見候に、外に華麗をかざり内に忠信の主なし、物を買取て其代をすまらず、過分の錢金を借て長く返さずたま〜乞ふ事あれば、言語を猛くして商人を罵る、如斯の人、罕にも武家にある事は何ぞや、やつがれ本より仁義を以て主とせず、利を以心とし、貧賤に困めども、いまだかくの如きの心はなし、若武士と成て恒の産あらん

には、争か道を行ん事の難かるべけんや、然るに武人官祿貴くして、人道に戻り候人、若祿にはなれ候はゞ、其時の心を推量て便なふ候、又客のごときは無産の至極にて、誠によるべなき浪人なり、然るに少も恒の心ある事は、尤神妙とやいはん、やつがれ爰を以、武士とならんに難からじとおもへりといふに浪客感嘆して商人を拜せり、

(註) 第十條

一六七四 世間子息氣質  
卷之三

幼少より親の手を離れ艱難を経て、一代の中には是程の身代に成し男なれば、萬に拔目なく一子太郎市に諸藝を習はせずして、小さき時より十露盤を弾かせ、なみ〜にて世はわたられぬといふ事を、骨も固まらぬうちから身にしみつく程いひ教へければ、親の世智成形氣を見ならひ、八歳より寺入して手習するにも、よその子共と違ひ、清書に書損ひとて判紙壹枚、

末にせず、墨に袂を汚さず、雪踏のはなを踏切らず、大勢の子共の毎日つかひすつる、反古のまろめたるを拾ひ取、一枚／＼皺のばして、日毎に屏風屋張貫人形の細工人方へ賣て、人しらぬ錢をまうけ、其錢にて内より持來る外に判紙をもとめ、紙つかひ過してふ自由なる子共に、一日一倍増の利にて是を貸し、萬事惡ひすらこくふ斷も臺所を離れず、食<sup>た</sup>き男が朝夕の餘り物を、澤山に乞食にとらす迄の制當をし、其小頼惡き仕形、親父ばかりは悦びて一生身を持損なふ者にあらずと、手代共に末々たのもしく云わたされしに、いよ／＼十六七の比世の人に變りて、とかく外へ交る事なく、義理を缺きて細かなる算用して、ついにあだ錢一文つかはず、

(註) 「勘略は世帯藥き、過た始末形氣」の條

〔二六七五〕世間子息氣質

若旦那の學問は此家の破滅の基ぢや、何やら五倫の道だていうて、壹分も

商ひの助けになる事はせいで、子曰仰せらるゝ、手間で、ちと十露盤を稽古なされたら、お家のお爲にならうと親旦那の耳に入れば、親父尤とうなづきむす子をよびつけ、汝學問だてをして、商賣の道を脇にするは大きな誤り、其上儒道を學ぶ者が、夕部も茶屋へ行て夜半八つに歸り、おのれが酒きげんにまかせ、湯の水のと寝てゐる家來共を起し、たはけをつくすが儒者の教か、論語讀みの論語知らずめ、重て書物を止にして、帳合を大事にかげよと、額に皺をよせて叱らるゝ、○下

(註) 「異見はきかぬ藥心をなほさぬ醫者形氣」の條

〔二六七六〕世間子息氣質

爰に長堀の流の末に木曾山の材木を請て、抓取のある時節思ふ儘に儲けこみ、大坂瓦の軒高く三十餘人の手代を抱、近國の木山をうけ心の海廣く仕合にのつて來る帆柱の買置に、願ひの儘なる利徳を得、身體根強き楠分

限商ひの軍法者、世帯の掛引抜目のない親父なれば、不斷ためつけて三人持し子共が智恵をあたつて見、いづれ成共商人にそなはりし器量の忤子を見極め、庶子なり共惣領に立、此家を繼がせんと、行末迄も身代の傾かぬ工夫をし、長町の下屋敷へ三人の子供を呼びよせ、惣じて商人は日夜に心を配り、萬事に氣をつけ、儲ける事を考出すが肝要なり、我此座敷の亭へ上り、西南の野を見わたす中に、儲けらるべき種を見出せり、汝等三人亭に行きて見出し來らば、末子成共我家の跡取とさだめ、金銀家財を殘らず讓るべしといひわたせば、○下略

(註) 「末子が智恵は上々箱入の銀持形氣」の條

〔二六七七〕本朝二十不孝卷一

加賀の城下本町筋に絹問屋左近右衛門といふ所、久しき商人身體不足なく、其身堅固に暮し、子二人有しが、屋繼は龜丸とて十一歳姉は小鶴と名付

十四才なるが形すぐれて一國是さたの娘なり、不斷も加賀染の模様よく色を作り品をやれば、誰いふ共なく美人絹屋と門に人立絶ず折ふし縁付比なれば、あなたこなたの所望、此返事母親も迷惑して申のべし、手前よろしければ兼て手道具は、高蒔繪に美をつくし、衣裝は御法度は表向は守り、内證は鹿子類さま、調へ京より仕付方の女を呼寄、万事おとなしく身をもたせ、今は誰殿の娼子にもおそらくはと、母親鼻の高き事白山の天狗殿も貌を振て逃給ふべし、

(註) 「跡の判たる娼入長持」の條

〔二六七八〕寛天見聞記

つらく案ずるに、寛政十年に品川へ鯨上りし頃よりは、町家の者漸々に御掟を破り、驕りに長じたり、前にいふ如く諸人已が愛する處におぼる、故に衣食住の分限を忘れて、終に金銀不融通となりたる也、

〔一六七九〕百姓義卷三

聖人の御語に、耕や飢其中にあり、學ぶや祿其中にありとのたまひし、是を悪くこゝろえて、農人の子に生れても、農業を賤しみ、學文して祿を得んなどとおもひ、書物讀習ひ、學者にともなふあり、略下

(註) 第九條の一節

〔一六八〇〕破レ家ノツヅクリ話卷之下

近來ノ百姓ハ、商人ヲ羨ミテ、農作ニ力ヲ盡サズ、アキナヒヲ致ス者多ク、甚シキ害アリ、

(註) 「那奉行心得方」の條

〔一六八一〕植崎九八郎上書

近來百姓共農業の本意を捨て奢に長じ、少も有餘のものは耕作を召仕の

男女に任せ、自分は美服を着し遊興を事とし、江戸表へ一度出候得ば繁花へ心を奪れ、彌惡道へ落入、亦小百姓の中にも耕作を疎き事と心得、多くは出度心持に相成、女子杯は親心にても兎角江戸を見せ度、江戸へ奉公に差出せば、其當座は古郷忘がたく泣かなしめども、次第に江戸の風俗に染、後には己が古郷を見下し、見様見真似に各江戸へ出したがり、江戸の風俗を見ては田舎を疎み候もの多く成行、民の本業すたれ、おのづから、粒米不足に成申候、自由自在に江戸へ出居仕候事になり候得共、江戸は諸國の掃溜と言傳へ、江戸表次第に人増繁昌を添候様見へ候得共、本すたれ末にはしり、喰人多く耕人少く、土地荒れ路ふさがり、安危の基第一大切の儀奉存候

(註) 天明七年七月、執政松平越中守への上書第八條

〔一六八二〕徳川禁令考卷四十三

一 庄屋惣百姓共自今以後不應其身家作不可仕但町屋之儀は地頭代官差

圖を受可作事

- 一 百姓之衣類此以前より如御法度庄屋は妻子共絹紬布木綿脇百姓は布木綿計可着之此外はるり帶等にも致し申間敷事
- 一 百姓之食物常に雜穀を可用米は猥に不食様に可申間候事
- 一 在々所々に而温飽切麥素麵蕎麥切饅頭豆腐以下五穀之費に成候間商賣無用之事
- 一 市町江出むさと酒のむへからさる事
- 一 名主惣百姓男女共乗物停止之事
- 一 佛事祭禮等に至迄不似合其身結構仕間敷事

(註) 寛永二十年「在々御仕置之儀ニ付御書付第一、第二、第四、第五、第七、第十一、第十六條

〔一六八三〕徳川禁令考  
卷四十三

一 公儀御法度を怠り地頭代官之事をおろかに不存扱又名主組頭をは眞

の親とおもふへき事

- 一 名主組頭を仕者地頭代官之事を大切に存年貢を能濟公儀御法度を不背小百姓身持能仕様に可申渡扱又手前之身上不成萬不作法に候得は小百姓に公儀御用之事申付候而もあなとり不用物に候間身持を能致し不便不仕様に常々心掛可申事
- 一 名主心持我と中悪者成共無理成儀を申かけす又中能者成共依怙最眞なく小百姓を懇にいたし年貢割役等之割少も無高下ろくに可申渡扱又小百姓は名主組頭之申付候事無違背念を入可申事
- 一 朝おきを致し朝草を蒞晝は田畑耕作にかゝり晩には繩をないたわらをあみ何にてもそれくの仕事無油斷可仕事
- 一 酒茶を買のみ申間敷候妻子同前之事
- 一 百姓は分別もなく末の考もなきものに候故秋に成候得は米雜穀をむさと妻子にもくはせ候いつも正月二月三月時分の心もち食物を大

切に可仕候に付雜穀專一に候間麥粟稗菜大根其外何に而も雜穀を作り米を多く喰つふし候はぬ様に可仕候飢饉之時を存出し候得は大豆の葉あつきの葉さ、けの葉いもの落葉などむさとすて候儀はもつたいなき事に候

一家主子共下人等迄ふだんは成程疎飯をくふへし但田畑をおこし田をうへいねを茹又ほねをり申時分はふたんより少喰物を能仕たくさんにくはせつかひ可申候其心付あれは情を出すものに候事

一男は作をかせき女房はおはたをかせき夕なへを仕夫婦ともにかせき可申然はみめかたちよき女房成共夫の事をおろかに存大茶をのみ物まいり遊山すきする女房を離別すへし乍去子供多く有之て前廉恩をも得たる女房ならば各別なり又みめさま悪候共夫の所帯を大切にいたす女房をはいかにも懇可仕事

一公儀御法度何に而も不相背中にも行衛不知牢人郷中に不可抱置夜盜

同類又は公儀御法度に背候徒者など郷中江隠居訴人有之而公儀江召連參御詮議中久々相詰候得は殊外郷中の草臥候又は名主組頭長百姓并一郷之惣百姓にくまれ候はぬ様に物毎正直に徒成る心持申間敷候事

一百姓は衣類之儀布木綿より外は帶衣裏にも仕間敷事

一たは粉のみ申間敷候是は食にも不成結句以來煩に成ものに候其上隙もかけ代物も入火の用心も悪候万事に損成ものに候事

一親に能々孝行之心深くあるへしおやに孝行之第一は其身無病にて煩候はぬ様に扱又大酒を買のみ喧嘩すき不仕様に身持を能いたし兄弟中よく兄は弟をあわれみ弟は兄に隨ひたかいにむつましければ親殊之外悦ものに候此趣を守り候得は佛神之御惠もありて道にも叶作も能出來とりみも多く有之ものに候何程親に孝行の心有之も手前ふへんに而は成かたく候間なる程身持を能可仕候身上不成候得はひんく



の煩も出来心もひかみ又は盜をも仕公儀御法度をも背しはりからめられ籠に入又は死罪はり付なとにかゝり候時は親之身に成ては何程悲しく可有之候其上妻子兄弟一門之ものにもなけきをかけ恥をさらし候間能々身持を致しふへん不仕様に毎日毎夜心掛申へき事右之如くに物毎入念身持をかせき申へく候身持好成米金雜穀をも持候は、家をもよく作り衣類食物以下に付心之儘なるへし米金雜穀を澤山に持候とて無理に地頭代官よりも取事なく天下泰平之御代なれば脇よりもおさへとる者も無之然は子孫迄うとくに暮し無間き、ん之時も妻子下人等をも心安くはこくみ候年貢さへすまし候得は百姓程心易きものは無之よくく此趣を心かけ子々孫々迄申傳へ能々身持をかせき可申もの也

(註) 慶安二年二月廿六日「諸國鄉村江被仰出」第一、第二、第三、第五、第六、第十一、第十二、第十四、第十五、第十六、第二十三、第三十二條

〔一六八四〕常憲院殿御實紀 卷七

市井に令せらるゝは、金紗、繡物、惣鹿子、今より後婦女の衣服に用ふる事を許さず、すべて新奇の染織を停止すべし、小袖の表一端價銀二百目限りたるべしとなり。

(註) 天和三年二月五日の條

〔一六八五〕有徳院殿御實紀 卷十

けふ寺社奉行、町奉行、勘定奉行、勘定吟味役の輩に仰下さるゝは、農民等耕耨のときを失はず、農功を勵むべきやう心いれて諭し、田畝も荒蕪することなく、河渠、堤防専ら心を用ひて、常に修補を加へ、新田開墾するもよきことなれど、ふるき田畝、又は秣の妨となるは開墾なすべからず、時にあたり用ゆべきこともなきに、山林の木を伐とり、賣ひさぐことかたくあるべからず、金銀はさらなり、何によらず多くありとも、猥に費すべからず、酒菓の

類も猥に造り出すべからず、今世上にうりかふ萬の品物、何一つ備らぬ事もなきに、なを多く造り出さば、人々身のほどにこえて、かひもとむるやうになり、をのづから家資窮乏し、つゝには國のおとろへとなるべければ、米穀藥物の外、衣服調度の類、事あたらしく製し出すはいふまでもなし、たとひ有來れるとも、物數増益する事なきやうにすべし、新に遊樂の地をひらき、人多く集め、其地を富さんためとて願ふとも、たやすくゆるすべからず、ゆへなくして諸の價を俄にたたくする事、またく商人等が、きはをこえて利を貪らんと、のわざなれば査檢を加ふべし、くさぐさの品物を、のれ一人うけばりて、價ひきくひさが、んなど、申請ものありともゆるすべからず、國々より産するもの、轉輸の便よからず、途中敗損なからんやう、心をいれてはからふべし、近年農商等より、ねぎ聞ゆる事ありても、うけ引事なかりしを、去年よりうけ引べき旨令せられしにしたがひて、もしこひ出るものありとも、其可否をえらび、諸民賑救のたよりともなるべきはとりあげ、其餘

は用ゆべからず、すべて諸民の賑救になるべきは、米穀のゆたかにみゐると、風俗儉素にして、人々浮費なきとにあれば、夫をむねとして諸事を沙汰し、其他くさぐさのわざくはだて、申こふとも、主管するもの、み利を得て、下民たよりよからぬ事は、審察して事はからふべしとなり、』さればこの令條は、かねて御垂問ありしに、各盛旨の外、議し奉る事もあらざるよし聞えあげしをもて仰下さる、今より後、この令をもと、し、所屬のもの等にもよくさとして、ことはからはすべしとなり、

(註) 享保五年五月十二日の條

〔一六八六〕文昭院殿御實紀

また親子、兄弟、夫婦はさらなり、すべて親戚をしたしみ、奴僕をあはれみ、主あるものはその勤を怠るべからず、家業に専らこゝろいれ、万事身の分際をまもるべし、

(註) 正徳元年五月の條

〔一六八七〕慶喜公御實紀

近年在方に浪人者を留置、百姓ども武藝を學び、又は百姓同志相集り、稽古致し候由相聞、農業を妨候計にも無之、身分を忘れ、氣がさに成行候基に候得者、堅相止可申候、勿論故なくして武藝師範致し候者、狛、猥に村方江差置申間敷候。

(註) 慶應三年三月十九日の條

〔一六八八〕嚴有院殿御實紀 卷三十

此月令せらるゝは、市中にて籠あんだに乘るもの有よし聞ゆ、こはさきざきより禁ぜらるゝ所なれば、今より後、市中は更にもいはず、品川、千住、板橋、高井戸をかぎりて乘るべからず、若背くものあらば、捕へて嚴罰せらるべしとなり。

し、轎并に籠あんだゆるされざるもの、他國にゆくか、又は他國よりいたるも、品川、千住、板橋、高井戸よりうちはのるべからず、違犯のものは罰せらるべしとなり。

(註) 寛文五年二月の條

〔一六八九〕常憲院殿御實紀 卷五十六

市人制外の衣服着する聞えあり、前令を守り、いよ／＼諸事かろくすべし、そむくものあらば、吏をめぐらし、とらへしむべしとなり。

(註) 寶永四年十月の條

〔一六九〇〕有徳院殿御實紀 卷六

この月令せらるゝは、市井男女衣服のこと、前々より美麗を停禁せらるゝといへども、頃日はことさら華美になり、下襲までも心用ゆるよしきこゆ。

いとひがごととなり、市井の男女、女婢まで、さきに令せられしむねを守るべし、もし違犯せば曲事たるべし、かつ見あたるに従ひ、搦とらるべしとなり。

(註) 享保三年五月の條

〔二六九一〕文恭院殿御實紀 卷六十六

近ごろ百姓市人ら過分の葬埋、壯大の墓碑、法號の事等により、きびしく令せらるゝむねあり、

(註) 天保二年四月十八日の條

〔二六九二〕天保新政錄 卷之一

子供手遊の義、近來増長いたし、高直の品賣買いたし候趣に相聞、幼年の節より宜品を見馴、自然奢侈を導き候基にて、不可然筋に付、是迄仕入の分は、當八月限賣捌、九月朔日より、銀目は壹匁、錢は百文を限、右直段より高直の

品決して賣出申間敷候、若相背候者、於有之は、役人相廻、密々買上げ、吟味の上、嚴重の咎可申付候。

(註) 天保十三年五月廿二日御觸

〔二六九三〕常憲院殿御實紀 卷四十六

此日前々より、煙草田圃につくるべからずとし、ばく令せらるゝといへども、頻に煙草多くつくり出せば、來年よりは、ことしまでの半たるべし、残れる地には、其土宜の穀類を作るべし、もし違犯せば、曲事たるべき旨、公料は奉行、代官、私領は地頭よりかたく命ずべし、ことしまで煙草つくりし地の町歩の額しるし、來二月までの中に、勘定所へ出すべし、はた穀類つくるべき地の種子たらざる所は、奉行、代官、地頭より是を沙汰し、田圃荒蕪せしむべからずとなり、

(註) 元祿十五年十二月二日の條

〔二六九四〕台徳院殿御實紀  
卷卅九

辻談義といふは街談巷説として、先輩殊にこれを厭ふ所なり、近年や、もすれば土民を勸化すと稱し、この企をなす者あり、尤正法にあらざれば停禁すべし、

(註) 元和元年七月廿四日の條

〔二六九五〕台徳院殿御實紀  
卷五十六

令せらるゝは喧嘩争論の地へ一切馳參るべからず、公法違犯の者誅罰せらるゝ所へ、其事にあづからざるやから出むかふべからず、邸宅火災のとき、其藩中の徒并父子兄弟の外は、かけあつまるべからず、市街火事の時は、武家上下とも一切出あふべからず、この令下さるゝの後、もし違犯するものあらむには、速に嚴科に處せらるべしとなり、

(註) 元和八年二月十日の條

〔二六九六〕殿有院殿御實紀  
卷四十六

けふ令せらるゝは、火災の地へみだりにまかるまじき旨、さきざきより令せられしに、近頃人多く集るよし聞ゆ、消防にあづかるものゝ外、一切火邊に近付べからず、其地見定るために人を遣るも、その地に近づかず、遠所より見定め歸るべし、鳶口持べからず、火に近き巷に、故なくたゞずむものは、追捕べき旨町奉行に命ぜらるれば、かねてよく告諭すべしとなり、

(註) 延寶元年二月十一日の條

〔二六九七〕殿有院殿御實紀  
卷三

大目付もて令せらるゝは、二月二日より、市中に吏をつかはし、かぶきものを追捕せしむれば、諸家にもかぶきものをかくまひ置くべからず、かぶきものといふは、中小姓以下の者にて、天鷲絨の襟ある衣を着し、大撫付、立髪、大鬚をつくり、太刀、大脇差をさして、遊行するものなりとぞ、

(註) 承應元年正月廿日の條

〔一六九九〕常憲院殿御實紀  
附録卷上

御承統のはじめ、諸國巡檢使を立られ、州郡の利病ども尋訪せられしに、駿州富士郡今泉村の農民五郎右衛門と云るもの、父母に孝を盡し、姉弟に睦じく、そのうへ年のみのりあしき時には、己が儲蓄を散じて、近郷の者の飢餓を賑救するよし、彼使等かへり來りて聞え上しかば、御感な、めならず、天和二年二月仰事下りて、五郎右衛門が所持の田地九十石、永く賦稅徭役をゆるさるべきよしの朱印を賜り、また林大學頭信篤に命じて、それが傳を作り刊行せしめらる、當家の代となりて、孝子節婦、力田篤行のものを旌表せらる、事は、是をもて權輿とするにぞ、

〔一六九九〕常憲院殿御實紀  
卷五

また諸國に立られし高札の文は、忠孝をはげまし、夫婦、兄弟、諸親戚にむつび、奴婢等までも仁恕を加ふべし、もし不忠不孝のものあらば重罪たるべし、萬事奢侈あるべからず、屋舎、衣服、飲食に至るまでも儉約を守るべし、よからぬ心もて、あるは偽り、あるはことほりなきひがごとといひかけ、利欲をかまへ、人の害なす事有べからず、すべてをのゝ産業をはげむべし、盜賊ならびに悪行のものあらんにはうたへ出べし、かならず褒賜あるべし、博賭はかたく停禁たるべし、喧擾、爭鬭する事あるべからず、もしさることあらんには、其所へ會集すべからず、及傷せられしものを、隠しをくことあるべからず、大辟のものある時は、其事にあづかる輩のほかは馳せ集るべからず、人賣買きびしく禁ずべし、年期に抱置奴婢ともに十年を限るべし、其定をそむくものあらんには罪せらるべし、譜第の家人、あるは其地に住み來りしもの、他へこし、妻子もちたる者、故なくして呼かへすべからず、これらの旨よろしく守るべし、違犯せば嚴科のがるべからずとなり、

(註) 天和二年五月の條

〔二七〇〇〕有徳院殿御實紀  
卷四十三

新乗物町醫石川東雲が家僕久助が忠義を褒顯せられ、錢五十貫文を賜ふ、

(註) 元文元年五月廿七日の條

〔二七〇一〕淳信院殿御實紀  
卷三十

神田豆腐商の奴與兵衛主につかへ志力をつくし、郷閭の模則共なるべき  
行ありとて、金十兩を賜ひ褒せらる、

(註) 寶曆九年七月八日の條

〔二七〇二〕文恭院殿御實紀  
卷三

この月駿河國傳馬町盲人祝榮養女まきに銀二十枚賜ふ、こは五歳の時よ

り祝榮に養はれしが、近年の凶作にて米價貴く、その日を送るたづきなき  
に、母はめしいて、祝榮も年老て中症をやみしかば、己は旅籠屋にやとはれ  
などして孝養怠らず、父死してより母一人をからうじて養ひ置し事聞へ  
上しによてなり、

(註) 天明七年十二月の條

〔二七〇三〕凌明院殿御實紀  
卷十六

此年豊前國宇佐郡四日市村の里正次右衛門、豊後國速水郡小浦村の里正  
儀助、同國日田郡庄手村里正作左衛門、南高瀬村里正常右衛門、豆田町商人  
藤四郎、みな貧民を賑救せしこと奇特なりとて、褒銀若干をあたへらる、

(註) 明和四年の條

〔二七〇四〕有徳院殿御實紀  
卷六

小普請田丸文次郎某母に不孝なるをもて、大路をひきわたし、磔刑に處せらる。

(註) 享保三年六月十六日の條

〔二七〇五〕常憲院殿御實紀 卷十

此月市中にて猥りなる小哥流行する事は、た新奇の事を上梓してうりひさぐ事を禁渴せらる。

(註) 貞享元年十一月の條

〔二七〇六〕常憲院殿御實紀 卷二十九

此ごろ倡家の事并に遊戯、淫穢の事ども著作し、流傳するものあれば、著作の者はいふまでもなし、剽竊せしもの、賣買せし者ども四人繫獄せしめ、其刻板は町奉行所に收めらる。

(註) 元祿七年正月の條

〔二七〇七〕有徳院殿御實紀 卷十五

この日市井に令し下されしは、すべて梓に上る書冊の類、古より定れるものはさることなれど、みだりに異説をまじへ、作り出せるは禁ずべし、淫褻卑僻の風俗をやぶる類は、改めしうへ、其板を破り去るべし、又家々の譜牒などにすがり、新に作り出して、其實をあやまることあるを、其流裔等、たがへるさまを訴へ出ば、たゞしあるべし、をよそ新出の書を板にゑらば、著撰の人と、書舗の名をまさしくしるし置べし、當家祖宗の御ことをはじめ、朝政にかゝはる文は、一切に禁ぜらる、しかしやみがたき事ありなば、奉行所にうたへ、上裁をあふぐべし、これらにたがふことあらば、速に處刑せらるべしとなり

(註) 享保七年十二月十六日の條



〔二七〇八〕有徳院殿御實紀 卷十五

令せらるゝは、即今世上にて、すぢなきことをいひふらし、并に士女相はかり情死をとげしを、心中と名づけて梓にちりばめ、よみありき、うりひさぐことは前に禁ぜらる、しかるに頃日みだりになりゆくよしきこゆ、いとひが事なり、今よりのち屬吏を廻し、逮捕せしむべきにより、見及ば、土人とらへ置、直月の廳へうたへ出べし、もし見ながら捨をき、巡察の屬吏めしとらへば、その地の町役人まで、過失たるべしとなり、

(註) 享保七年十二月七日の條

〔二七〇九〕まゝのまにく

當月始繪草紙屋に芝居役者并遊女繪悉く停止、人情本と云中本の作者爲永春水入牢、柳亭種彦高屋彦四郎は頭永井五右衛門敷より呼出し、其方に柳亭種彦と云者差置候由、右之者戲作致事不宜、早々外へ遣し相止させ可申と云渡たりと

かや、春水が作は元より柳亭が田舎源氏など皆絶板と成

(註) 天保十三年六月の條

〔二七一〇〕有徳院殿御實紀 卷十三

此日戸田山城守忠眞のもとに、松平甲斐守吉里が儒臣荻生惣右衛門茂卿をめし、六諭衍義の譯を命ぜらる、この書は琉球人程順則が著せし書にて、さきに松平薩摩守吉貴より獻ぜし所なり

(註) 享保六年九月十五日の條

〔二七一〕有徳院殿御實紀 卷十三

荻生惣右衛門茂卿譯せし六諭衍義御覽に備へしに、盛慮に應ぜり、これは世上風俗のためにもしかるべければ上本あるべし、序をも茂卿にかきて奉るべき旨仰下さる、

(註) 享保六年九月二十二日の條

〔一七二〕右文故事  
卷之十三

六諭衍義大意ヲ板行セラル大意ノ序ニ見ユ是儒者室新助直清ニ命シテ譯セシムル處也詳ニ御版ノ部ニ載ス

(註) 享保七年二月の條

〔一七三〕有徳院殿御實紀  
附録卷十

其ころ松平薩摩守吉貴に琉球國の政事文學のさまども御尋ありしかば薩摩守より彼國の風俗ども聞えあぐるとて程順則が著したる六諭衍義を獻じたり其書初學のものにたよりあるべしとて室新助直清に譯せしめらるしかるに多くかの國の俗語にて書しものなればかの國の俗語をよく解したるものに命じ給はんにはしかじと答へたてまつる是によて荻生惣右衛門茂卿こそしかるべけれとてやがてかれに命ぜられけるに

日ならずして譯したてまつる後直清御前に候せしにこの書を出してしめし給ひ世の風教のたすけともなるべければ國字に解すべしとの御事なり直清うけたまはりて家に歸り和解三冊につゞりて進覽す其體裁はこのころ所なく感じ思しめすといへどもかくては詳かなるに過てわらはべなどには辨へがたかるべし今少しさとしやすきやうにあらたむべしと仰あり重ねてこれを刪りかれを改め二冊となして御覽に備ふこれにて文意もはやく聞え御旨にもかなひたれとて市井の塾師石川勘助某をしてこれをかゝしめられ直清に序跋を加ふべしと仰ありやがて其詞をつくり御前にもち出てよみけるにかたじけなくも御筆をさへ添給ひ遂に町奉行に下して梓行せらるさて勘助をば大岡越前守忠相の廳にめして褒銀など下されけるかくて府下のわらはべに手習さする事をすぎはひとするもの、數を尋ねられしに八百人にあまれり其中に名の聞えたるものは勘助をはじめ十人ばかりなりしをいづれも町奉行の廳によび

て新刻六諭和解各一冊をあたへける。これかの塾師等が無益の事かきてわらはべにさづけんより、これらのことをかきてならはせなば、童教のたよりともなるべしとの御旨とぞ聞えける。

〔一七一四〕日本教育史資料  
卷十九

奉行大岡忠相町年寄奈良屋ヲシテ手習師匠馬場春水石川勘助荒木蓉谷星野伊織等十人許ヲ召シ六諭衍義大意ヲ賜ハシム是ヨリ先キ吉宗程順則カ六諭衍義ヲ得テ大ニ悦ヒ荻生茂卿ヲシテ訓點シ室直清ヲシテ譯解シ石川勘助ヲシテ書セシメ名ツケテ六諭衍義大意ト曰フ遂ニ忠相ニ命シ梓行シ府下手習師匠最名アルモノニ與ヘシム

(註)「東京府教育沿革」中享保七年六月二十二日の條

〔一七一五〕日本教育史資料  
卷十九

御府内ニ於テ手習師匠ヲ立渡世致モノ其町内ノ弟子子供ハ不及申他所ヨリ通ヒ弟子迎モ依怙最負ナク心ヲ用ヒ教ヘ可申候手蹟ハ貴賤男女ニ不限相應ニ認候ハネハ叶ハサルモノニ付假始ニモオロソカニ心得ヘカラス一體士分ノ者ハ子供仕込文武ノ藝能夫々整ヒ居リ候得共町家夫々輕キ輩モ別段學問ト申ハナク又兩親ノ育養方モ心得違不少候得ハ幼年ノ不行跡ヨリ遂ニナラハシトナリ候事則風俗ヲモ亂ス種ニ相成候間町内ニテ教ヲ主トスルハ手習師匠ノ者ニ有ヘシ筆道ノミナラス風俗ヲ正シ禮儀ヲ守リ忠孝ヲ訓ユヘキ事肝要ト心得可申文字認メ候程ノ者ハ自然物讀ムコトモ出來ルモノナレハ御高札御文段御觸事又ハ庭訓モノ其外實語教大小學婦人ハ女今川ヲ始メ女誠女孝經ノ類ヲ筆道ノ傍ニ訓ヘ可申候凡人情ハ兩親文盲又不束者ニテモ自分ノ子ハヨカレカシト存ヌ者ハナシ依テ師匠タル者ハ子供ヲ信切ニ訓ヘ仕置嚴重ニ候得ハ其親心必厚可存候左候得ハ手習師匠致者計ラス御政道ノ一助トモ成リ世間

風俗ノ益不少候間此主意篤ク耽ト相辨神妙ニ教育可申候右ノ趣厚ク相心得教訓宜敷者又ハ等閑ニ心得教育方不行届者ハ取調ノ上可及沙汰品モ可有之條不漏様可申通旨名主へ可申聞候事

(註) 幕府「學制」中「正徳元年達」、「日本教育史資料」に依れば天保十四年四月にも略同文の達がある

〔二七一六〕徳川禁令考 卷三十四

前々被仰出候御法度之趣相守候様にとは兼々百姓共江申聞候由には候得共末々之者は一通リ申渡候計に而は心に留覺候者は稀成事に而御法度違罪科に被行候者度々之事に候處剩身之誤をも不存族も有之候就夫在々に手跡之師などは可有之候得は俗人寺社之輩に不限左様之者とくと申含手習之間々に重立候御法度書を始五人組帳或は人之教に可成事手本にも書せ又は讀覺させ候は、可然候近キ比伊奈半左衛門御代官所武州足立郡淵江領島根村醫師順庵と申者御褒美有之たるにて上意にも

相叶候儀推察可被致候件之品々面々勘辨致し其所風俗に應し候様取計可被申事

(註) 享保七年十一月「御法度書之趣百姓共得と覺候者無之故度々科人も出候に付御書付」

〔二七一七〕山本大膳五人組帳諭告文

天保七申年被仰渡候五人組帳前書御條目之義年々村々より小前惣連印差上候分箇條落又は誤字等有之、大切之御條目御趣意を失ひ候に付御改正之上、別段村々心得方と可相成御法度筋御書加、向後御取締之ため、御藏板之上、一村壹冊づ、御渡被下候に付、兼而被仰渡之通、農隙休日之節者、月無懈怠、村限小前末々え不洩様組合惣代立會爲讀聞、御法度之趣爲相守、村々若年之者ども素讀に爲致候は、五人組帳之義は、老若男女善惡之差別を辨、民家永續之御趣意に付、手習師匠等え篤と申諭、第一に爲讀習、御法度筋忘却不致様教導可致云々、

(註) 天保七年山本大膳の役所より出したる五人組帳頒布に關する諭告文

〔一七一八〕日本教育史資料  
卷六

家中宗子八歳ヨリ廿歳之間入學望次第タルヘシ但廿歳以上ノ者并庶子  
庶人タリ共品ニ寄可令入學事學者着座之次第可隨年之長幼事

(註) 岡山藩「花島教場」中寛文六年の「掟」の一節

〔一七一九〕日本教育史資料  
卷六

學校中別ニ一塾ヲ設ケ諸生部屋ト號シ平民ノ子弟ヲシテ寄寓シ藩士入  
學ノ寮ト其居ヲ異ニシテ修學セシム

(註) 岡山藩「平民ノ子弟教育法」の條

〔一七二〇〕日本教育史資料  
卷六

家中ノ子弟ヲ舉テ授讀者トス郷中農民ノ子弟ヲ舉テ小待者トス但小待  
者ハ入學生ヲシテ吏員教師等ノ使令ニ供セシムル者學厨吏ヲ置歩士ヲ  
以テ之ニ充ツ司書庫兼小待者頭ヲ置

(註) 岡山藩「花島教場」中「職員」の條

〔一七二二〕日本教育史資料  
卷四

爲四民教導泰雲院殿學校可被仰付御内意之處御逝去に付今般右思召を  
繼文武之學校申付候依之新井白蛾義學頭申付其外諸藝師範人等右様追  
々可申付候條諸士は勿論町在之者迄も志次第學校え罷出習學可仕候

(註) 加賀藩「平民ノ子弟教育方法」の條、寛政四年閏二月六日の記録

〔一七二三〕日本教育史資料  
卷四

以來二七之講日陪臣之人々且御歩並以下暨町在之者迄相届候者不時に

罷出聽聞之義勝手次第に候事但罷出候人々は別に名札學校横目え指出可申候

(註) 加賀藩「平民ノ子弟教育方法」の條、寛政十年五月二十四日の記録

〔二七二三〕日本教育史資料 卷八

文學ノ儀ハ人道ノ當然ニ付貴賤共ニ學校へ入學定ノ通無懈怠可致出席尤頭立候格合之者ハ修己治人ノ當務別ニ精シク可致講究事

(註) 高鍋藩「法令抄」第八條

〔二七二四〕日本教育史資料 卷八

外席 巫祝僧徒の席也但農商より出つるも同じ

(註) 中津藩進脩館「館中内約」第八條

〔二七二五〕日本教育史資料 卷三

出家沙門若ハ庶人ト雖トモ受業ニ來候面々ハ登堂平等タルヘシ

(註) 米澤藩安永六年二月十日「興讓館當直勤方」第二十七條

〔二七二六〕日本教育史資料 卷六

平民ノ内志願ノ者ハ藩學校へ入學スルヲ許ス唯昇降着席ヲ異ニスルノミ授業之際ハ一樣ニシテ區別アルコトナシ

(註) 林田藩「平民子弟ノ教育法」の條

〔二七二七〕日本教育史資料 卷二

平民ノ子弟モ亦之ヲ藩立學校ニ入ルヲ許セシノミナラス勉メテ入學セシムルノ主意ナリ然リト雖當時士民ノ別頗ル嚴ナルヲ以テ自ラ之ヲ憚ルノ弊アリテ入學業ヲ修メシ者磯部元恒(菓子屋)業トセルモノ(田中維

德(商人)ノ外前後數人ニ過キスト云フ

(註) 神戸藩「平民ノ子弟教育法」の條

〔二七二八〕日本教育史資料 卷八

享保十七年子六月十一日鬼丸聖堂ノ儀御國中道藝ノ要場ニテ諸生日々經義ヲ講明イタシ上下ヲ教化シ風俗ヲ正シ政道ヲ輔ケ專ラ勸戒ヲ施スヘキ御先代御家中ニモ每度學問ヲ勵ミ忠孝ヲ專ニスヘキ旨仰出サルトイヘトモ其志厚カラス殊ニ百姓町人ナトハ出入サヘ用捨イタシ只今ノ通ニテハ勸學ノ御賢慮下ニ相達セス此ニ因テ門人ノ内人才德行ヲ選ミ日々輪番ニ經書ヲ講釋セシメ勿論諸組並ニ百姓町人迄モ聽聞イタシ學風興起セシメ度由實松林左衛門ヨリ奏議スルノ旨諸役所ヨリ上聞ス公聞召サレ彌上下ニ限ラス學問ヲ勤メ忠孝ヲ勵ミ政道ヲ輔翼セシムヘキノ旨仰出サル御家中郷内山内津内町家マテ御觸アリ此時鍋島主水工學

問方頭人被仰付

(註) 佐賀藩「學事上ノ諸制度」の條

〔二七二九〕日本教育史資料 卷十

日講所 ・ 養賢堂構内ニアリテ毎日經傳ノ内俚語俗話ニ講解シ商賈農民等ニ聽聞セシム

(註) 仙臺藩「學制」中

〔二七三〇〕日本教育史資料 卷六

平民ノ子弟ハ其勝手ニ任セ多ク寺子屋家塾ニテ修學セシメ其藩學ニ入ルヲ請フモノハ亦之レヲ許セリト雖トモ平民ハ郷校ヲ置キ藩士ヨリ教師二人平民ヨリ撰テ句讀師五人ヲ置キ之レヲ訓導セリ其學ニ篤志ナルモノハ賞シテ之ヲ勵ス

(註) 赤穂藩「平民ノ子弟教育方法」の條

〔一七三二〕日本教育史資料  
卷三

領内小學校ノ設立ハ文化年中ニ係ルモノ六ヶ所曰ク五惇堂曰嚮義堂曰  
遜新堂曰正誼堂曰會輔堂是ナリ而シテ兒童教育順序ノ如キハ春正月ヨ  
リ夏四月農桑繁忙ノ際ニ至テ休業シ秋九月ヨリ始メ歲末ニ至テ一時休  
業スルモノトス且開業中ハ藩學校ノ教長毎月二回乃至三回巡校シ學校  
所在近傍ノ老少ヲ集メ孝悌仁義ノ道ヲ講シコレヲ聽聞セシム

(註) 伊勢崎藩「平民子弟ノ教育方法」の條

〔一七三二〕日本教育史資料  
卷四

御領内社講御立被置候義ハ庶民ノ爲メ孝悌忠信禮義廉恥ノ道ヲ説示シ  
名教ヲ厚シ淳朴ノ風ヲ成スノ基ヲ開キ候様ニトノ御趣意ニテ道學堂ニ

比候得ハ郷學ノ姿ニシテ聖世ノ小學校ニ相當リ候故教導筋凡小學ノ教  
ヲ準則ト致候義第一ノ心得ニ候世上詩文雜博ノ學ハ徒ニ浮靡ノ習ヲ長  
シ反テ政教ヲ害スル事故程朱閣齋以來先達ノ痛戒禁スル處ニ候右ノ趣  
ハ其方共ニモ兼々心得ノ事ニハ候得共輕薄ノ輩ハ世上學風ニ流レ易キ  
モノニ付猶又右ノ趣意彌相守童蒙先入ノ教ヨリ一同相辨候様教諭可致  
候幼年小子ノ素讀ハ四書小學近思錄五經順々ニ爲熟讀候テ蒙求唐詩選  
其他雜書ハ相授申間敷候講授ノ書ハ講堂講解御定ニ倣ヒ小學論孟ヲ循  
環致シ會讀ノ書ハ四書小近ト定置追々力付候者モ候ハ、同所會讀御定  
書目ノ内切近ノ書ヨリ追々講習可致候其他史傳子集等ノ講會ハ堅無用  
ニ候閣齋先生以來嘗テ無之事ニ候抑學術ニ於テ一定ノ見所無之内ハ孔  
孟程朱ノ書ニ非レハ手ニモ取ラヌ程ニ不致候テハ聖學ハ得ラレサル趣  
閣齋兼々被申置候間此遺訓ヲ御家學風ノ宗旨ト心得堅相守心ヲ盡シ教  
導可致候



(註) 新發田藩安政五年「郡中社講へ」の達

〔一七三三〕日本教育史資料 卷四

安永年間講堂ヲ建テ平民入學ヲ許ス又各郷社講ヲ置論一郷ノ教師庄屋名主平民ヲ論セス學力アル者之ニ任ス

社講場ハ庄屋或ハ名主ノ宅ニ於テス又一時儒官ヲシテ郷邑ヲ巡回セシメ講解シテ平民ヲ教諭セシムルコトアリ近郷ノ地ハ屢往テ講解ス又藩主自筆スル所ノ勸學筆記ヲ頒附ス以上直ニ許ナリ社講ハ毎年米壹石ヲ與ヘ平民タリトモ獨禮ヲ許ス藩制藩主歳首ノ賀ヲ受クルノ日郷中ノ名主ヲ廣坐ニ集メ藩主禮場ニ臨ムノ時其坐前ヲ通行ス之ヲ總禮ト稱ス特ニ禮場ニ進ンテ講スルヲ獨禮ト稱ス村長功勞アルニ非サレハ獨禮ヲ許サス社講ハ平民タリトモ特ニ之ヲ許ス其篤志勉強ノ者ハ褒賞ス米金及蔵板ノ書籍其重キハ或ハ名主格藩制獨禮タリトモ其格ナケレハ其村名主ノ管轄ノ者ハ名主管轄スルヲ得ス庄屋ノ管轄或ハ小頭格藩制郷邑ヲ十五組ニ分ツ一村ノ長ヲ名主ト稱シ一組ノ長ヲ庄屋ト稱ス或ハ庄屋格或ハ苗字ヲ許ス亦各其居所ノ地ノ高下ニヨル例ヘハ平民ハ名主格名主ハ小頭格トスルノ類生徒モ亦褒賞アリ米金錢城及書籍

下市中ハ醜金ヲ以テ社講所ヲ設ケ其經費ハ藩ヨリ補助ス筆墨紙及ヒ蠟燭ヲ給ス蠟燭ハ市中賣

問商業ヲ妨クルヲ以テ多ク夜中講習スルカ爲ナリ教師其人ニ乏シキ時ハ都講ヲシテ之ヲ兼任セシム褒賞

郷村ト同シ但其名義ハ町代格年寄格檢斷格ナリ又別ニ細民婦女等ノ爲メニ專ラ小學ヲ講シ孝悌忠信ノ道ヲ教諭ス其篤ク信スル者ヲ賞スルニ金錢書籍婦女ニハ或ハ反物等ヲ以テス皆藩費後來或ハ張弛アルモ一ニ此制ヲ維持シテ變革ナシ

(註) 新發田藩「平民ノ子弟教育法」の條

〔一七三四〕日本教育史資料 卷四

歴々は勿論末々に至るまで皆學問なくしてゆくへきやうなし民百姓までもみな學問して身を修め家を齊る事は前に記す通りの事なり聖學不案内ゆへ民百姓などは學問は入らぬ事とおもふ人も有るへし夫は心得違なり至極末々に至るまで一人も學問せぬ人有るへからすこれ天地自然動かぬ處の道理にて修道の教なりこれに背は皆無理蟹の横道なり

(註) 新發田藩安永八年五月「勸學筆記」の一節

〔一七三五〕日本教育史資料 卷四

學問之儀御上御世話ヲ以御家中ハ勿論在中迄モ吞込此節組々ニテ講書致シ候者餘程有之然ル處各下役共ノ内ニテ學問筋不吞込之族ニモ候哉在方ニテ學問致候者ヲ批判致候由相聞候爾來右様ノ心得違無之様下役共ヘ内々可申聞候

(註) 新發田藩安永八年四月「郡奉行ヘ」の達

〔一七三六〕日本教育史資料 卷六

明和三年ノ頃城下使者屋敷ニテ儒者大村庄助ヲシテ經書ヲ講シ市郷ノ者ヘ聽聞セシム云々又原河某ナルモノ足輕ヨリ學才アルヲ見出シ學文修行申付別扶持ヲ給シ成業ノ後町人訓導申付候

(註) 津山藩「平民ノ子弟教育ノ方法」の條

〔一七三七〕日本教育史資料 卷六

天保十二丑年松平越後守齊民今ノ從三位確堂ノ代町奉行稻垣武十郎藩ノ儒者市尹ニ拔擢セララル、モノノ建議ヲ採リ市街ニ教諭場ナルモノヲ設ケ市儒ヲシテ市民ノ子弟ニ句讀ヲ授ケ講義ヲ聽カシメ女子ニハ女教師ヲ置キ女大學女今川等ノ女訓ヲ授ケ且紡績裁縫ノコトヲ教ユ後安政年間ニ至テ毎月三次町年寄以上ニ講義ヲ聽問セシメ市尹以下僚屬之ニ臨視ス而シテ其教師ハ藩主ヨリ扶持ス

(註) 津山藩「平民ノ子弟教育ノ方法」の條

〔一七三八〕日本教育史資料 卷六

平民ノ子弟ハ放任ニシテ父兄ノ見込ヲ以テ家塾寺子屋ニ就テ修學スルノミ有終館會頭ノ中教諭掛リヲ命シ毎月兩日日限不定町役人立會老弱ニ拘ハラス平民ヲ教諭所ニ會シ小學論語等ヲ題トシ字句ニ不拘人倫ヲ本

トシ孝悌忠信ヲ教諭ス子弟學術優等ノ者ヘハ修業扶持ヲ給シ或ハ家臣並ニ取立或ハ苗字帶刀ヲ免シ又ハ合印ヲ許スコトアリ

(註) 高梁藩「平民ノ子弟教育方法」の條

〔一七三九〕日本教育史資料 卷五

平民ノ子弟ハ其勝手ニ任セテ家塾寺子屋ニテ修學セシメ其藩學ニ入ルヲ請フモノハ亦之ヲ許セリ且教諭方ナルモノヲ設ケ毎歲二次或ハ數次管内ヲ巡リ到ル處盡ク老若男女ヲ會シ心學道學ノ主意ニ據リ之ヲ訓導セリ故ニ平民ノ學事ニ從事スルハ特ニ禁止セサルノミナラス時ニ其學ニ篤志ナルモノヲ賞シテ之ヲ勵マセリ

(註) 豐岡藩「平民ノ子弟教育方法」の條

〔一七四〇〕日本教育史資料 卷五

一金百疋

滋茂町 今井三郎右衛門へ

其方儀年來文學心掛宜敷相聞へ一段之事ニ候依之爲御賞美御目錄被下之候以後町方之者共相集心得候丈ケノ義理爲説聞可申候事

九日市下ノ町村 忠平へ

一金百疋

其方儀道學心掛宜敷相聞一段之事ニ候依之爲御賞美御目錄被下之候以後當郡御領中村々之者相集心得居候丈ケ之道爲説聞可申候事

(註) 豐岡藩「學事獎勵之原始」の條、天保四年十一月五日

〔一七四一〕日本教育史資料 卷三

- 一 子供手跡ハ不及申孝道行儀作法等之教訓致候儀ハ勿論之事ニ候へト
- モ彌以等閑無之様可致事
- 一 於途中口論之事
- 一 樂書之事

- 一 婚禮養子等之節并ニ平日礫打候事
  - 一 正月十四日十五日婦人之往來ヲ妨ケ候事
  - 一 寺院法會說法之節不作法之事
- 右之趣平日手習子供へ急度相示シ若不相用者相聞エ候ハ、於親手前急度相示シ候様可致事

(註) 彦根藩「家塾寺小屋設置制度」の條、寛政八年十月晦日「町奉行ノ諭達」

〔一七四二〕日本教育史資料 卷三

一手跡指南之者共之内教導方宜敷者又ハ不行届之向モ相聞エ候幼年之者ハ教次第行狀正敷成人之上ニ一統之風俗ニ拘リ候儀手跡之儀ハ勿論萬端惡習ニ流レ不申様行儀能質朴廉直之風儀ニ生立候様御國恩ヲ不致忘却親兄へ孝養方ヲ旨トシテ指南之者共以後教導方一樣ニ相成候様篤ト申合自分々々之子弟教導致候心得ニテ實意親愛ヲ以テ飽迄世

話行届候様聊非道之筋無之様厚ク相心得可申候

一 親兄之者ヨリ子弟之者共へ指南之者教導之筋聊不相背師恩ヲ重シ假初ニモ輕蔑不致幼年ヨリ人柄正敷相成候様朝暮ニ相示シ可申事

(註) 彦根藩「家塾寺小屋設置制度」の條、弘化四年一月二十三日の諭達

〔一七四三〕日本教育史資料 卷三

平民ノ子弟ハ各自ノ意向ニ任セ家塾寺子屋等ニ於テ修業セシメ藩立學校へ入學スルコトヲ許サス而シテ農民等ノ學事ニ從事スルコトヲ禁止スル等ノ制ナク反テ神官僧侶里正等ニ諭シテ人民教育ノ義方ヲ示シ其獎勵宜キヲ得タル者ニハ臨時賞與セシモノアリ

(註) 館林藩「平民ノ子弟教育方法」の條

〔一七四四〕日本教育史資料 卷三

平民ノ子弟ハ各自ノ意向ニ任セ家塾寺子屋ニテ修學スルノミ然レトモ家塾寺子屋ヨリ其子弟ノ清書ヲ藩學ニ出シ蒐集シテ之ヲ執政ニ致シ閱覽ニ供スル毎月一次以テ其業ヲ獎勵セシコトアリ

(註) 松本藩「平民ノ子弟教育法」の條

〔二七四五〕日本教育史資料 卷十

文化中攝津守資順備後守資言道灌十三世之孫ノ未孰レノ代ヲ詳カニセス慶安公移ト六諭衍義諺解トヲ版ニ刻ミ封内ニ頒布シ先ツ民ヲ富シ而後之ヲ教エント欲ス文化末年備後守資始代備後守ハ追書也此時備中守ト稱ス前ノ教授松崎慊堂ニ命シ五倫口解ヲ撰ハシメ之ヲ刻ミ亦封内ニ頒布ス此皆唯民之父兄ヲ教ユルノミニ非ス亦其子弟ヲ教ユル所以也

(註) 松尾藩「平民子弟教育方法概略」の條

〔二七四六〕日本教育史資料 卷六

平民多クハ無學ニシテ頑愚或ハ放蕩無賴ナル者アルヲ憂ヘ之レヲ教育スルカ爲メニ各村里正ヘ父子訓ヲ頒布シ農閑ニハ讚聞セルノ法ヲ設ケシコトモアリシ

(註) 林田藩「平民ノ子弟教育法」の條

〔二七四七〕日本教育史資料 卷八

五常五倫之道は人々日夜暫くも不離交々行ふ事なれば銘々常に其道を存候はつ之事に候得共末々愚かなるもの共女わらんへなと其道理を不辨して心ならぬ不孝不義の邪なる事を仕出して罪科を得る事も可有之候間此書付之趣を人別妻子從類迄不殘毎年毎月不怠讀聞せ連々に能く合點致し候様細かに心を用ひもし不心得なるものには猶其わけを申聞せ必ず無懈怠相守可申候若此旨を用ひす不孝不義放逸之輩有之候は、

不隠置早々可訴出之且又忠志孝心善行之者有之候は、可申出之依其次第賞罪可有之候

(註) 森藩「學事上ノ諸制度」の條、延享四年二月の達

## 解 說

江戸幕府に依つて統整せられた社會は、その施政久しきに及んで、次第に弛緩の兆を示すに至つた。

元來江戸幕府の庶民政策としては、先づ秀吉の時代にその原型をみた(一六四九)五人組制度を強化し、百姓・町人をして地域的に團結せしめて社會秩序の維持と強化とを企圖したことが擧げられるのである(一六五〇—一六五五)が、特に農民に對しては嚴重な規定を設けて轉業と移住とを原則として許さず(一六五六)、各藩も亦これらの政策を組織的に實施したのである(一六五七—一六五九)。然るに江戸時代の中期より貨幣の流通が漸次盛となり(一六六〇・一六六一)、町人の社會的地位が自

ら向上し、反面武士が困窮するに至つて、士農工商といふ近世社會の身分制度は漸く動搖を免れない情勢に立ち至つた(一六六二—一六六五)。

かくして近世後半期の思想形態は自ら前代のそれと著しく變らざるを得なかつた。先づ江戸時代初期の士分の間に見出された武士道精神は、平和な時代が續くにつれて漸く形式的となり、一方町人はその富裕な經濟的背景に基いて、從來の素朴單純な生活から、次第に奢侈を求めらるやうになり、爲めに元祿以降一般の風俗は大なる變化を來すに至つた(一六六六—一六六九)。元來町人は利己的であり打算的である(一六七〇—一六七三)。さうした町人本來の打算的傾向は、この時代に至つて彼等の生活の全面に浸潤するに至り、子供を養育するに際しても、さうした傾向が随時に現はれるに至つたのである(一六七四—一六七六)。

かくのごとく町人が華美な生活を以て社會的に進出するにつれて、彼等は漸く武家社會の窮屈な生活から脱して、彼等独自の生活を享樂せんとする態度に出で(一六七七・一六七八)、農民も亦その氣風に倣つて、農業を賤み、或は都會に赴かんとする風潮を生じた(一六七九—一七八二)。かくて思想的には、江戸中期以後に至つて中世時代と可なり異なつた個人主義的傾向が現はれるに至つたのである。

幕府は先づこれらの社會形態、思想形態に對應して、百姓町人に對して彼等の天職を勵ましめ、

常に分限を越えざらしむる方針をとつた。尤もかゝる方針は士分に對してもとられたものではあるが、一般庶民、特に百姓に對しては徹底的にそれを要求したのである。寛永二十年の「在々御仕置之儀ニ付御書付」〔一六八二〕、慶安二年の「諸國鄉村江被仰出」〔一六八三〕等は江戸初期に於ける有名な觸書であるが、其處には庶民の日常生活上の極めて些細な點まで、上述のごとき方針を徹底せしめんとしてゐる。而してかゝる誠諭はその後も屢々令せられて枚舉に遑のない程であり〔一六八四—一六八七〕、且嚴罰主義を以つてその徹底が期せられた〔一六八八—一六九二〕が、併し乍らそれらが餘りにも頻繁に發令せられたことは、却つてその効果が必ずしも適確でなかつたことを示してゐる〔一六九三〕。社會秩序の維持といふ根本方針に基く幕府の教化政策は、以上のごとくその分限を守り、天職に精勵せしめることの誠諭の他に、或は辻談義を禁じ〔一六九四〕、火事場其他人々の群り集り勝な場所に出向くことを屢々戒め〔一六九五・一六九六〕、更に徒黨を組んで法規を無視した所謂かぶきものを斷壓したこと〔一六九七〕等の中に於いても亦現はれてゐる。

江戸幕府の對庶民教化政策は以上のごとき消極的な禁令の布達のみには止まらない。文教振興の策をとつた幕府は、一般庶民の向上に對し全然無關心ではあり得なかつた。かくして幕府は昌平坂學問所の門戸を庶民にも開放し〔一三三四・一三三八〕、或は孝義者、善行者を表彰し〔一六九八—一七〇三〕、或は不忠不孝の者を嚴刑に處し〔一六九九・一七〇四〕更に元祿以後、一般市井の間の頹廢的氣

風の一源泉をなした出版物その他に對しては之を嚴重に取締つて〔一七〇五—一七〇九〕庶民の道德的向上を圖つたのである。

江戸幕府の積極的な教化政策の現はれとして更に注目すべきは、教諭所を設立し、又民間の寺子屋を活用して一般庶民の道德的向上を企圖したことである。いふ迄もなく上に述べた觸書、論達の中にも、庶民の道德生活の目標を指示したものを見出し得るのであるが、綱吉時代から愈々儒教主義的教化政策を明かにして、五倫五常の徳を一般庶民の間にも徹せしめる爲に努力した。綱吉の所謂天和の忠孝札〔一六九九〕を始め、吉宗の『六諭衍義大意』の刊行したときはその一例である〔一七一〇—一七二二〕。特に吉宗が寺子屋の教育的機能を重視し、寺子屋を通じて『六諭衍義大意』を民間に普及せしめたことは注目せらるべきであつて〔一七二三・一七二四〕、當時庶民教育機關として普く發達してゐた寺子屋を獎勵し〔一七二五〕、それを利用して爲政者がその教學の方針を徹底しようとしたことは、御法度書、五人組掟書等をも寺子屋に於いて教授せしめたことに依つて明瞭である〔一七一六・一七二七〕。

藩の庶民に對する教育政策は、特別な施設方法を講せず、全く放置してあつた場合が少くない。けれども諸藩の中には、教育のための方策を講じ、種々なる施設をなしたものがあつた。それ等のうち藩士のために設けられて居る藩校への入學を許可したものがあつた〔一七一八—一七二七〕、又

幕府の日講〔一三三三〕の如き特別な庶民のための講釋をなしたものもある〔一七二八・一七二九〕。更に藩校とは別に郷學を設け、こゝに庶民を集めて教諭し、學問を奨勵した場合もある〔一七三〇―一七三六〕。これ等は學校の形をとつた教育機關を設けて庶民の教化に當らんとするものであるが、これを簡單にし、教諭所として施設した方策も見られる〔一七三七―一七四〇〕。庶民の教育機關として發展してゐた寺子屋に對し、藩がこれに手を下して、教化を進める方策も見られる〔一七四一―一七四三〕。庶民子弟の清書を集めて其業を奨勵するが如き方法も講せられてゐる〔一七四四〕。藩庶民のために六諭や五常などの教訓書を作つて、これを頒布し、教訓書、手習本などとして使用せしめ、これによつて教化を進めてゐる藩もある〔一七四五―一七四七〕。これ等は藩が庶民のためになした教化方法であるが、多くの藩はかくのごとき庶民のための方策を講せず、多くの場合には庶民の學問を喜ばなかつた如き傾向にあつたのである。

## 第二章 教育の理想

〔一七四八〕久世條教

夫農業こかひのわさは國家の大本也神代のむかし天照太神御みづから  
神衣を織給ふ然れば太神さへかくのごとくなればまして下々の人少し  
の間もおこたるべけんや歌にもいたづらに世になすさみそはたとの  
神さへみそをおると聞にも御田作の事も又御世話なされし事あり如此  
の事をかゞみとしてはたらきつとむべし

(註)「勸農業」の條

〔一七四九〕五條施教

耕作の業は人々みないとなみつとめねば叶はぬことなり天下の人日々



身命をつなぎ飢渴の難をまぬがるゝも耕作して米穀をこしらへ上はや  
 んごとなき御身より下は垣生の小屋の賤民にいたるまでみなこれをも  
 つて食物とせざるはなしそれゆへにいには天子御みづから田作の  
 事をおこなはせ給へりかゝるたふとき業なればたゞ下様のなす事との  
 みおもふはおろかなることなり昔より民に士農工商の四品あり士はさ  
 ふらい農は百姓工はしよく人商はあきんどなりかく大切なるわざをな  
 すものゆへ百姓は士の次にありてしよく人あきんどの上につけりしか  
 るに耕作は家業の最上たるをしらずしていたづらにしよくにんあきん  
 どをうらやみ身を動して農作の正利をつとめず手をつがねて賣買の利  
 にはしり又は職人にならむ事をおもふこれ眼前の欲にまよふて後日の  
 ためを思はぬゆへなりまづ本業の耕作を大切につとめたるうへちから  
 のあまらば相はげみてその身にかなふほどの商ひなどいたすはもつと  
 もよき事なりたとへ町場繁昌の所たりとも村々に生れたるものは壹人

として百姓にあらざるものなししかれば其身のほどをわすれ一向に耕  
 作のことをすてるは本を失ふといふものなり

(註) 「耕作を勵し租税を完す」の條

〔二七五〇〕米澤藩伍什組合提書

百姓の天職は農業にて候其農業を勤て父母妻子を養ひ貢を上納て四  
 民御世話の料となし候故人々安く家々さかえ候然といへども人一人た  
 ちにては遂がたきものゆへ其組合を立置互に助て互に其世涯を安く過  
 す事に候

(註) 享和元年二月二十七日米澤藩「農民伍什」の一節

〔二七五一〕大原幽學書簡

少しの私にても是を改め人を導き度く心掛け候考へは先づ天地の和は

其物々を率て物々生育する所以を考させ候是を身心に當て考候事に至り候者共は五人組前書被仰渡候趣愈々難有相成父母の恩も愈々難有相心得愈々行狀正敷する事を好むに至る儀に御座候此志と相成候者へは天地和して身命あり故に人たる者は分相應に天地の和の如く人々に彌るの志し有たき者也と相教其味ひ心に止る事に相成候者へ相諭し候には先づ人の見る所をば善し人の見ざる所の悪敷の顯はるゝ時に常に行狀善しくとも人は是を善しと言はず故必々先づ是を恐懼し自分勝手又心の穢も戒め慎むべし又人の見ざる所をば尙能勤たる事抔顯はるゝ時は人の見る所に過不及の差ひ有るとも人は是を惡む事無し實に安く樂み廣し抔相教へ是等耳に入り候族には此理を以て人を教導する筋を能教へ其響に乗じ又繰返して都て口の先にて教諭する時は其教諭を被る者道理を唯口に演る事は知れども是を勤め守る事を得ず故に先づ自身能く道を守り勤めて教ゆべし其勤を見て是に歸伏する者は道理を口に演る

事は不得と雖も道を守り勤る事至るの筋々を詳かに相諭し尙々深く教導致し候には如此故家内の者を始め人々を導くには兎角口先にて教へんとすること勿れ人々を導く爲にとて唯々人の見ざる聞かざる所をば尙私の穢も無き様に終日守るに於ては所謂道心なれば道を修るの所以にして即自然の教至る是を守る事に至れば主たる者召使ひ抔を自ら仁愛する事心に浮かび仕はるゝ者も亦口にて教へずとも主人を心中に自ら尊敬して自然の義と成又道心は志廣し志廣ければ父は子に溺れずして慈む子は父母に自ら能事へて親み止む事無し夫は妻に情有て溺るゝ事なし妻は夫を尊敬して情滿るとも猥りには不近寄寢間も飯食も共にするとも心中に別あり如此の志なれば兄弟の席も亂るゝ事無く朋友の信も失ふ事無し此五つ何れも其己れが心より自ら生じたる禮なれば所謂從順なるべし又求て禮儀箇間敷は聊の事の差ひにも其禮忽ち亂るゝなり抔私二十有餘年如此教導致し候儀にて是唯心の運びを考學の事に

## して即心學に御座候

(註) 嘉永五年六月、幽學の辯疏狀

〔二七五二〕大原幽學書簡

室先生の性理と云へるは生れたる家を能守り其外を望まず其家業を能守るべきの事故家業二重三重にては懇にして何れも懈怠と成り一業も立事無し是に於て強欲却て其家を亡す理を詳に心得させ私門人に於ては家業二重を嫌ひ且其生れたる家の業行を變替する事を忌み或は百姓は百姓相應の衣食住を守らせ抔或は人生るゝに十月の中母の體內に有て其氣を稟る故其十月の間母の志所によつて生るゝ子善惡邪正の差ひ有る理を悉く諭し又母の心を穩かに持たしむるには其夫の志に有る理を悉く諭し候得ば主の心の置所によつて子孫までの不正との差ひ有る事を能く知り則改心致す事に相成も有之或は惡きを改むるは宜敷と知

りつゝも深き淵に陥りたる如く其事に離難く改め不得者も有之或は性質は變らぬ者と心得居候族は善惡共に事譯口に而已知て心に知らず且善き事を好みながら眼前の事に惑亂して終には己と己が罪を作る故其志所の惡きを改め善きに進むの爲めに門人同志議定して是迄己が不省を恥らひかくし置候中抔無腹藏心底打明けてらし合せて相互ひに其善と不善とを知り人の事にて己れを顧み候得ば常に自分の事は惡きも善き様に思ひ暮せし事抔相知れ其心の穢を洗ひ洗ふ事其性質によつて或は三四年或は七八年も磨きて本心の正しきに至らしむるの教に御座候

(註) 嘉永五年六月、幽學の辯疏狀

〔二七五三〕久世條教

家業をつとめ儉約を専らにするは天の道に従ふなり天は人のために万物を生々し給ふ也凡人一万あればその一万の用をなすものを生ず此ゆ

るに分にこえて奢をなし天下のものを餘計に遣ひ捨ればそれほどの天下の用不足する理也しかれば儉約ならざる人は天のにくみを受るぞかし病氣災難あひまどひて貧窮にいたるは詮方なく多くは家業をおこたると奢をなすによりて貧窮すこれは自らとるといふもの也

(註)「尙節儉」の條

〔二七五四〕五條施教

人の人たる道といふは本より其身に生れつきて有ものにて少しも外よりこしらへ付たるものにあらず其有の儘の道をおこなふに五倫とて五つのおしへあり父子には親あり君臣には義あり夫婦には別あり長幼には序あり朋友には信あり是古へ聖人の別にゑらび出して立たまへることにてもなく又むつかしき道にもあらず生れのままの本法なるゆへ今もむかしも鄙も都も上はやんごとなき御身より下は垣生の小屋の百姓

までも今日日用の行ひにて父母は子をいたはりしたしみ子は父母をうやまひしたしんで孝をつくし君は臣をいたはりたのもしく臣は君を大切に忠義をつくして奉公し夫は婦をいたはりむつまじく婦は夫を主人のごとくおもふて二心なくつかへ年長のもものは年幼のものをあはれみ年幼の者はとしかさのものをうやまひしたがひ朋友はたがい信實をもつて交りいひかわしたることばもかわらぬようにすべし是すなはち五教の行ひにて此五つをはなる、時は鳥獸も同じものにて中々人とはいひがたきなり人みなこのよき徳を我身に持ながら私欲のかつてにおほはれて悪き行ひのみいたしついに鳥けだものにもおとりたる心となり公事訴訟のあらそひ喧嘩口論のさはぎをなし甚しきは身をうしなひ家をほろぼし大罪人となるものなり此五つのおしゑさへよく行ひなばたとひその身はいかなる山奥一文不通の樵夫たりとも生知安行の聖人のむねにもそむかず本より神佛の御心にもよくかなふて祈らずとて

も常にまもらせ給ひまた公儀の御おきてにもそむかずしてついには御ほうびにもあづかり奉るほどの善人ともなるべき也

(註) 「五教を教人倫を明にす」の條

〔二七五五〕久世條教

誰か父母なきの子あらんや我生れし初より親の子を愛する事心力ともに瘁るこれを報事實に昊天の岡極やまのたかねに同じいかに心をつくすとも厚恩の萬分一も報ひがたきぞやよく考へて孝行致すべき事也誠なるかな親に孝心なるものは君に仕へて忠義あり夫婦の道たしく年長たる人を敬ひ幼をあはれみ朋友に交りて信あり善をこのみ悪をにくむものなるがゆへ父母に孝行を盡す事萬の善行のもと、は云也

(註) 「敦孝弟」の條

〔二七五六〕久世條教

風俗の厚薄あるこれをひとしくするは禮にあり禮のもとは敬つとむにあり中略よくつゝしめば仁義禮讓これより出来る也中略故に一家敬を行ふときは一家の内あつくむつまじうして一家丸しといふ一村敬を行ふ時は一村の風俗あつくやはらぎて一村丸しといふ丸く敬は天の道也天の道に従へば豊けき御代の難有さには目出度百歳の後子孫繁榮することうたがひなし能々おそれ敬べきなり

(註) 「厚風俗」の條

〔二七五七〕久世條教

國郡村里をわけ土地の上下によりて年貢のさだめ興るこれ上の下に需め下の上に供る所古今の通義なり御年貢を納め給ひて御國の御備其外公の諸事に用ひ給ふ事なれば疾より心掛其年内に納べし

(註) 「完賦税」の條

〔二七五八〕五條施教

御上には民百姓をば我子のごとく思召され和州へは荒地起返しの御手當金など下しおかれ其外困窮の年には拜借金を下され一年にても飢渴の難にあはず安穩にくらすべきようと御いたわりのあつくつねく民の垣とならせられあまたの御役人をもつて御世話なされ無理非道を制し鰥寡孤獨をあはれみたまへばこそ水難盜難其外のおそれもなく千里の旅も我家の内を行ごとく小は大にうば、れず弱は強にしのがれず安心してくらすなりしかればすべて其御備御手あてのつゑははなはだ莫大の事にて中々年々の御年貢金にては行きとゞきがたきほどの事勿論なりかゝる御慈悲にあづかるうへは手のまひ足のふむことをもしらずありがたくおもひ御上よりあづかり奉りし田畑を大切にし耕作にお

こたらず村中たがひにはげみあふて片時も油断なく五教のおもむきをよくわきまへ御年貢に未進せず御上の御備御手當のあつきようと心得其年内にはやくおさめ奉りねてもさめても泰平の御代の御厚恩をむくひ奉らんと相はげむべきことなり

(註) 「耕作を勵し租税を完す」の條

〔二七五九〕米澤藩伍什組合提書

一五人組は常にむつましく交りて苦樂を共にする事家族のごとくなるべし

一十人組は時々したしく出入て家事をも聞事親類の如くなるべし  
一一村は互に助合互に救合ふの頼母しき事朋友の如くなるべし

(註) 享和元年二月二十七日米澤藩「農民伍什」第一、第二、第三條

〔二七六〇〕大原幽學書簡

俗愚は自分了簡を専らとする故性質の悪き者は何程學ぶとも善きに趣く事無し抔常に是を言て聖賢の言を疑ふ者粗々多くして生れ質き才人にすぐれたる者も幼稚の時より是等を聞是に移り居て唯空々寂々として暮す中ちに其樂しみ樂しみと其利を利とする事に相成者亦々多く御座候是等に教候には萬物皆天地の和也故に人の命も心も則天地の和たる所以を諭し或は人心有り道心あり天地の和其儘の道心は四海に彌り性質狹量の者と雖も人欲の私を去れば則ち道心顯れてその相應に對する人々に彌り自分の勝手に離れたるもの故人心とは譬へば暑いとか寒いとか唯自分の身而已思ふを云ふ其狹き志故たわいも無き事に移り人心より知らず人欲の私と成る其私盛んと成ては譬へば潮の涌き出るが如く是を止むる事を不得漸々と惡を積み上げ終に大いなる災を引出す事にも至る其道心の微るゝと人心知らず人欲の私と成るの危きを其器

量相應に形を引或は朋友同志互に心の變化する味を考ては己れに當少しにても心に穢れ有れば則刻洗清め抔千變萬化の中終に身の危きを知り終に人欲の私を去る事を専ら學ぶに至る儀に御座候是に至り候者へは其學の進むに乗じて天地の和は萬物を生育す性は其和實の體にして聖人なれば天下を育ふ下愚と雖も其志を得て以て五人や十人の家内の者の如き導き不得と云ふ事無き筋々を分相應器量相應に心得させ候へば不孝不義に陥る發りも子孫滅亡の種を蒔く理も相分り愈々改心に志す儀に御座候是に至り候得ば其はずみに乗じて又始めの教方に歸り唯其場限りの樂みより末の樂み其時ばかりの利運より末の利運其場限りの孝行より行末の孝行抔と萬端末の見渡無ければ知らず危き事に至る味とを能諭し其人相應に心得させ候得ば人の囁り笑ふを忍び奸淫飲酒遊樂の族に不移慎み守る事に相成儀に御座候

(註) 嘉永五年六月、幽學の辯疏狀

〔二七六一〕町人考見録

是は親の時節三條通に住す、身上は中位の者にて有しが、男一人にて後の伊兵衛是なり、親愛に溺れ幼年より能藝をならはし、親果て成長にしたがひ、彌能を好み、夫につれて行跡迎もあしく成、元よりしかとしたる家業は無之、終に三十年程已前に身上潰れ申候、夫よりせん方なく終に蜂須賀淡路守殿へ能大夫に有付、一生終り申候、惣體町人の子ども、能藝を好み習ふ者、是迄家相續致ものは無之候、仔細は藝にはまり、商賣をわすれ、能役者と出會、朱に交れば赤く成、人は善惡の友に依るといふ事にて、行跡は彌あしく成、仕廻は家をつぶして、其果は可致業もなく、後は其筋の指南、又は少々の扶持方にて役者に有付、跡方もなく成行申候事、此伊兵衛には限り不申候。

(註) 「新屋伊兵衛」の條

〔二七六二〕日本永代藏 卷五

是を思ふに銘々家業を外になして諸藝ふかく好める事なかれ、是らも常々思ふ所の身とはなりぬ、かならず人にすぐれて器用といはるゝは其身の怨なり、公家は敷島の道武士は弓馬、町人は算用こまかに針口の違はぬやうに手まめに當座帳付べし、と金の有徳人のあまたの子ともに申わたされける

(註) 「朝の鹽籠夕の油桶」の條

〔二七六三〕米澤藩伍什組合控書

商戸の天職は有無を交易して人々の用を足さしめ其潤を以父母妻子を養ふにて候然といへども人一人立にては遂がたきものゆへ其組合を立置互に助て互に其生涯を安く過す事に候

(註) 享保元年二月二十七日米澤藩「商戸伍什」の一節



〔一七六四〕米澤藩伍什組合提書

一五人組は常にむつましく交て苦樂を共にする事家族のごとくなるべし

一十人組は時々したしく出入て家事をも聞事親類のごとくなるべし

一一町内は互に助合互に救合の頼母しき事朋友のごとくなるべし

(註) 享和元年二月二十七日米澤藩「商戸伍什」第一、第二、第三條

〔一七六五〕主從日用條目

一幼少の内より、手習素讀の稽古をし、十二三歳より、算盤を勵み習べき事、

一十五六歳より、家業に精を出し、奉公人同様に可働事、

一遊所は勿論、娘婢女其外色がましき事を可慎事、

一善友を擇て交り、あしき友に交るまじき事、

一遊藝は、分限に應じ、謠生花薄茶手前等は、少々心懸るとも、三絃淨瑠璃其

他の藝は、無用たるべし、たとへよき藝にても、夫に耽り家業を疎にすまじき事、

四十過る迄は、酒を慎み、禍の種と心得べき事、

一碁將碁双六、總ての勝負事は、身の仇なりと思ひ、務々携るべからざる事、

一衣服紙入提物、花美なる品を好ず、公道の掟を慎み守、質素たるべき事、

一暇ある折は、手習讀書し、忠孝五常の道を可辨事、

右之外、若き内は萬を慎べし、世上の若き人の中には、我身上のよきか、又は權威の續きあれば、自慢の鼻を高くし、我身を驕り人を直下し、三絃小弓尺八などを凝習ひ、すべて女子の集る席へ立交り、女に思われんとて身惠を飭り、或は惡き友にすゝめられて花街へ通ひ、一夜ながれの遊女の空誓文を、誠と思ひ現をぬかし、適諫言する人あれども、馬耳風、親の物は子の物よ、若いときは二度はなし、今少々の樂をせずして何年すべき、青樓の鳴居を踏ぬは男の中にあらず、いらぬ御世話よと、心の中につぶやき、親が辛苦し

て儲ためし金銀を、湯水のやうに遣ひ捨、はては青樓の拂につまり、雜費多く掛る金を借り、義理おろき借金につまり、終には親の勘當を受、仕つけもせぬ手代奉公するか、又は他人の内の食客となり、今迄の榮耀に事變り、飢食を喰さへ氣兼する身となるも、金銀の罰なり、されば子息たる人は、色と酒とを慎み、夜遊夜更しせず、兩親に案じをかけぬやう、常々心に懸て守べき事第一なり、二男三男たるものは、他の家に貫れ養子となるとも、其家の舅姑を實親のごとくに事へ、身上を譲れたれば、とて自分勝手の計をすべからず、其家を大切に守り、榮耀をはかるべし、養家の衰となるは、其身の不届にして恥辱なり、況や養家滅亡に及ぶは、養子たるもの大罪なり、他の家督を嗣ながら、我儘に長じ恩を忘れ、我働きと思ふこと、怒々あるべからず、實子なきゆへに養子となれば、萬事格別に慎守るべき事肝要なり、實家養家にかぎらず、身代に付、譲り受たる金銀を大切に、一圖に家業に精を出さば、商賣も繁昌し、其身の孝道もたち、世間の子息の鑑とも成べし、

(註) 「息男の式目」の全文

〔二七六六〕世間胸算用  
卷五

ある人のむすこ九歳より十二のとしのくれまで手習につかはしけるに、其間の筆のぢくをあつめ、其外人のすてたるをも取ためて程なく十三の春、我手細工にして軸すだれをこしらへ、壹つを一匁五分づゝの三つまで賣拂ひはじめて、銀四匁五分も受けし事、我子ながら只ものにあらずと親の身にしては嬉しさのあまりに、手習の師匠に語りければ、師の坊此事をよしとは譽給はず、我此年まで數百人子供を預かりて、指南いたして見およびしに、其方の一子のごとく氣のはたらき過たる子共の末に、分限に世をくらしたるためしなし、又乞食するほどの身體にもならぬもの中分より下の渡世をするもの也か、る事にはさまざまの子細ある事なり、そなたの子計をかしこきやうにおほしめすな、それよりは手まはしのかしこ

き子共有我當番の日はいふにおよばず人の番の日もはうきとりく座敷はきてあまたの子共が毎日つかひ捨たる反古のまろめたるを一枚一枚しはのぼして日毎に屏風屋へうりて歸るもあり是は筆の軸をすだれのおもひつきよりは當分の用に立事ながらこれもよろしからず又ある子は紙の餘慶持來りて紙つかひすごして不自由なる子共に一日一倍ましの利にてこれをかし年中につもりての徳何ほどいふ限りもなしこれらはみなそれくの親のせちかしこき氣を見ならひ自然と出るおのれくが智恵にはあらずその中にもひとりの子は父母の朝夕仰せられしは外の事なく手習を情に入れよ成人しての其身のためになる事との言葉反古には成がたしと明くれ讀書に油断なく後には兄弟子どもにすぐれて能書に成ぬ此心からは行末分限になる所見えたり其子細は一筋に家業かせぐ故なり惣じて親より仕つぎきたる家職の外に商賣を替へ仕つぎきたるは稀也手習子ども、おのれが役目の手を書事は外になし

若年の時よりすゝどく無用の欲心なりそれゆへ第一の手はかゝざることとのあさましその子なれどもさやうの心入よき事とはいひがたしとかく少年の時は花をむしり紙烏をのぼし智恵付時に身をもちかためたるこそ道の常なれ七十になるものゝ申せし事ゆくするを見給へといひ置れし○下

(註) 「才覺のちくすだれ」の條

〔一七六七〕主従日用條目

一娘たる身は、幼少の内より手習し、十二三より、縫針の業を勵習ふべき事、  
 一身分によりて、琴・三味線も心がけてよし、中分より下は、習ずとも苦しからず、暇ある時は、女大學其外身の躰方になるべき本を讀べき事、  
 一萬おとなしく、髮化粧・衣服等伊達を好ず、公道にし、常に端近く出ぬやうにし、諸事詞少にすべき事、

一 男子に心安げにもものいはず、世智賢事言ず、利口立をすまじき事、  
一 髪は自身に結習ひ、人に手つだはすまじき事、  
一 親の詞に背かず、孝行を忘ず、兄弟を敬ひ、弟妹を憐み、兄弟中睦くすべき事、

一下女丁稚にも、詞やさしく物を言、假にも大聲して叱るまじき事、

一 役者の噂、男のよしあしを取沙汰すまじき事、

一 内娘は、氣隨氣儘出安きものなり、養子聲をとらば、大切にし、親々の蔭身になり、貞心を盡すべき事、

右之外、諸事女子らしく優がたにし、假にも遊女、役者等の風俗を見習ふべからず、世には親の躰あしく、十二三よりませ過、男さへ見れば鹽の目し、可笑もなき事をげらく、笑ひ、又しても親々をせがみて、派手下作なる流行物を買せ、櫛髮指も、役者の紋の入しを嬉しがり、芝居は替る毎に見たがり、内に居れば食物を貪り、琴三絃には凝ども、縫針を嫌ひ、親々の詞に背き、假

初の事にも顔をふくらしてすね廻り、近所隣にて夜遊し、下女小僕こわいを使ふに叱りいじり、假初の事を親に告口し、又は賢がりて人の事をそしり、三日にあげず、物見遊参に出たがりなどする娘、まゝ多し、是皆親の躰のあしき故なり、餘所の悪風俗は見習ふべからず、育わろしといへども、元は其身の心がけあしく、氣隨氣儘より出る事にて、かやうの娘は容貌よくとも、見醒のするものにて、嫁入しても、舅姑の氣取も得せず、夫につかへる事も疎にて、終には去られ、其身は勿論、親兄弟の顔をも汚すものなり、慎むべし、

(註) 「娘の式目」の全文

〔一七六八〕絲亂記  
卷五

それにつきては御前に心得をものがたりせん、まづ第一には夫の父母とおもひ、手水の湯よりうつたちて、朝御膳、夕御膳、湯風呂、行水夜のふしども、夏ならば團扇にて涼しくし、蚊をくゆらせ、冬ならば火燧、懷爐にあたゝめ

て、萬事に心をつくさるべし、夫れものゝふの戰場にむかふときおやをもわすれ、家をもわするゝとや、まあ其ごとく此家を出るより、此家をわすれて再度歸らんとおもひをなし玉ふなよのつねの祝言だにかくのどほりましてや、此度の祝言は敵味方の婚儀はれいが中のはれいぞや、うしろぎたなき心持ちて、かたきの一家に笑はれな、下の男女には、いづれにも慈愛をほどこせよ、ことに女人の身にしては、人をせたぐることなかれ、夫は外をつとめ、女は内を守るといふことの、内を守るを心得そこなひて、奉公出入のものまでにうとまるゝをおもひやれ、ねたみそねみはうへうのやんごとなきにもあるなれど、男にうとまるゝ、其の初はねたみなり、子孫のたゆるもねたみぞや、さはいへあまりねたまぬもまたそうぐしく、脇心ありやすらんとうたがひのかゝるためしもあるぞとよ、ついへ始末は女の見まつへなれば、よくくつとめてけんどん、邪見におもむきて、ものを惜むことなかれ、人はともいへ、神佛心に信心いたされて、目だつばかりの物

詣かならず不貞の女にあり、よく心得て居らるべし、

(註)「新屋九郎右衛門祝言の事并ト玄妻孫娘に諫言の事」の條

〔二七六九〕萬の文反古  
卷二

他人口からは申されぬ事只今迄のおはつそだてやう我等ひとつ氣に入申何の町人の入らざる琴小舞踊までをならはせかぶき者のやうに御仕立わけもなき事に存候我くづれが娘はさながら下子はたらきこそさせまじ似合たる手業眞綿つませ糸屑成ともひねらせ置けば見分はよくて世帯のために成申候今程は爰元の新在家の衆さへ庭の片隅に下機を立られ兩替町に諸職人に借屋出來申事むかしはない事なれども算用づくにて皆く住ひを替られ内義の花見月見にも大乘物をやめて其用の時ばかり辻駕籠をかりてこどりまはしにして出られしも時代にて見よく候

(註) 「縁付まへの娘自慢」の條

〔一七七〇〕本朝二十不孝  
卷二

伊勢の國鳥羽といふ大湊に、出崎の藤内とて貧家に煙をたて、蟹の手業の釣針の鍛冶住しが、藤助と名付て一人の子を持、老の立ゐるの手祐たすかりあつかは鑛いかりの槌つちをうたせ、かゝる浮世習にて親は燐み子は孝を竭を道なり

(註) 「人はしれぬ國の土佛」の條

## 解 說

既に述べたごとく、江戸時代には士農工商の身分が相當嚴重に確定せられて居たから、教育の理想も當然この制度的制約を蒙つて居た。武士に關しては既に前編に取扱つたが、その他の身分

の者に就いては教育の理想も主として江戸時代中期以後に明瞭となつて來たので、本章にその概略を取扱ふこととするのである。

身分を明確に定められたこの時代には、分に安んずることは凡ゆる人々に對する教育の理想であつた。農民に就いて云へば、『久世條教』には農桑のわざは國家の大本であるとして農桑を勵むべきことを勧め〔一七四八〕、『五條施教』には農民は士分に次ぐ高き「品」位に置かれて居るが故に、これに對する十分なる矜を持つて一向耕作に専心すべきを諭して居る〔一七四九〕。かくて「百姓の天職は農業」と説かれ〔一七五〇〕、徒に町人の生活を羨むことを戒め〔一七四九〕、知足安分が強調せられた。例へば大原幽學が説いた性理の説の如き専ら家業を守り本分を辨へることを強調してゐる〔一七五一・一七五二〕。随つて奢侈を戒め、儉約を守ることが農民の重要な徳目と考へられたのである〔一七五三〕。

知足安分並に節儉は主として個人教育の理想と考へられるが、對人關係としては五倫五常の徳目が身分に應じて説かれて居り、これが農民その他の教育の理想となつて居た。『五條施教』には人の人たる道として五倫を掲げ、この道は人の生れながら有するもので、之をそのまゝ行ふことが教育の目的であると考へて居る〔一七五四〕。『久世條教』には孝を以つて五倫の根本なるを説いて「父母に孝行を盡す事萬の善行のもと」となし〔一七五五〕、「敬」の徳を以つて仁義禮讓の生ずる所で

ある〔二七五六〕と説いて居る。又農民には納税の義務を守るべきことが教へられ〔二七五七・一七五八〕、主君と農民との關係は主としてこの點から強調せられて居るのを見るのである〔二七五七・一七五八〕。農民相互の關係は『米澤藩伍什組合掟書』に一例を見るごとく相互親睦扶助を主張せられて居り〔二七五九〕、大原幽學は人の生活が天地の則に従ふべき所以を論し、天地の則は和なりとして人の道も和でなければならぬことを教へてゐる〔二七五一・一七六〇〕。

以上は主として農民に就いて述べたのであるが、教育の理想に關する根本原則に於いてはその他の場合にも變る所はないやうに思はれる。屢々農民と對蹠的とさへ考へられる町人に就いて考へて見よう。分に安んずるといふことは獨り農民に限らなかつた。『町人考見録』には商人は専ら家業たる商賣に専心すべきことを論し〔二七六一〕、『日本永代藏』には「公家は敷島の道武士は弓馬、町人は算用こまかに針口の違はぬやうに手まめに當座帳付べし」と教へられて居たことを述べて居る〔二七六二〕。「商戸の天職は有無を交易して人々の用を足さしめ其潤を以父母妻子を養ふ」にあると掟書に定められた〔二七六三〕のも、町人としての身分の限界を示したものと考へられる。五倫五常は士農程には嚴重に説かれなかつたが、對人關係は必ずしも無視せられたのではない。『米澤藩伍什組合掟書』に例示せられる通り、町人も農民と同じく五人組、十人組を組織して、組内に常に和睦共調すべき旨が諭されて居る〔二七六四〕。

町人の子弟の教育の理想をよく現はして居るものに「息男の式目」がある〔二七六五〕。之を見る時、商戸の子弟は何よりも家業に出精すべきことが教へられ、常に分限に應じて教養せらるべきことを説いて居る。唯彼等はその家業の關係より手習素讀算盤等實用的なる教科の習得を必要とせられ、又五常の道も「暇ある折」は學ばねばならぬと説いてある。『胸算用』には手習師匠が商家の子の徒に打算に長けたるを喜ぶ親を戒めて専ら手習に出精すべきことを教へて居る話が叙述せられて居る〔二七六六〕。「息男の式目」に對して「娘の式目」は町家の子女の教育の目的を説いて居る〔二七六七〕。この中にも身分に應じた教養の必要を説くと共に従順貞淑なる女大學に説かれた女子を以つて理想的女子と解して居る。『絲亂記』〔二七六八〕に述べられた女子はつましやかな貞淑なる娘を女子の理想としたものであり、『萬の文反古』に説かれた女子は實用的なるものを女子の理想と考へた〔二七六九〕が、是等は何れも「娘の式目」の或る部分を抽出して説かれたものと考へてよいであらう。

職人の場合も分を守るべきことは農商と異らず〔二七六二〕、五倫五常の中でも孝が重視せられたこと〔二七七〇〕も他の庶民と同様であつた。『米澤藩伍什組合掟書』に示された近隣と和を重んずべしとせられた主旨は職人にも適用せられたものと考へてよいであらう。

### 第三章 教育の施設

〔二七七二〕日本教育史資料  
卷十九

江戸之頃ハ青蓮院入木道並御家流筆學所或ハ幼童筆學所何某又ハ何堂等之掛札相見申候此等ハ中興數々之流名起リ候ヨリ之儀ニモ可有之ト覺申候人別帳ニハ手跡指南又ハ筆道指南何某ト認候様覺申候其他近在共手習師匠ト相唱上方筋ニハ寺子屋ト稱候趣承リ申候右ハ最寄寺院ニテ多ク就學致シ候故之由ニ御座候明治四年戸籍御取調以來雜業ト認申候尤唐様書家並素讀算術指南之向モ同様ト覺へ申候

(註) 明治十六年譽田己之橋取調書の一節

〔二七七二〕台徳院殿御實紀  
卷廿八

仙石豊前も關原のとき、石田に與力して所領を奪はれ、京二條邊にて手習の師となり、宗也の名のりてゐたりとぞ、

(註) 慶長十九年十月十二日の條

〔二七七三〕武家義理物語  
卷四

其者は今ほど西の京といへる所にまぎれ、白坂外記といへる名をかへ、天原流波とよびて、面むきは、手習の指南して、今も武藝をこたらぬよし語れば、○下略

(註) 「成ほどかるひ縁組」の條

〔二七七四〕江戸愚俗徒然噺  
第一

或御旗本の御家來、浪人して女房は四歳の男の子、貳歳の女子をつれて、靈岸島邊に安き借家して手習讀物をおしへて業とする、手習子漸七八人も



あり、其片手間に屋敷の時、内職せし楊枝を削り、女房は長屋内の世話にて紙たばこ入の賃錢、問屋仕事などして、夫婦隙なくかせぎけれど、子供あり、店賃から中々暮しに足らず、二枚あるものは一枚と成、殊に此頃の難義いふ計なし、借家の地主は町内にて富家也、惣領の男子六七歳程に成なれば、家主の頼みにて毎日讀物の稽古をおしへに通ふて過しける、

(註) 「人間貧福の判言葉の事」の條

〔二七七五〕雲萍雜志  
卷之二

むかし、泉州に豪富の商人あり、圍碁を好みしかば、この道をもて世をわたれるもの、多く所々より入來りける中に、江州にて諸侯につかへたる何某人の讒によりて身退き國を去りて、堺に手習の師となり、多くの弟子を集めて世渡りとせしが、○下

〔二七七六〕有徳院殿御實紀  
卷十七

處士菅野彦兵衛年頃學に志し、生徒をあつめ教授せるが、私に義學を興さん事をこひ出しかば、町奉行諏訪美濃守頼篤してたゞされしに、かれ等實によく、生徒をみちびくを褒せられ、金三十兩下され、本所にてその地をたまふ、

(註) 享保八年十一月十五日の條

〔二七七七〕維新前  
第二 前東京市私立小學校教育法及維持法取調書

師ノ身分ヲ舉グレハ舊幕臣、諸藩士、浪人、書家、師家ト殆ド相類スル者、醫者、隱居、神主、僧侶、其他町人ナリトス又婦人モ之アリシナリ  
右ノ中、專業者即チ一ニ生徒ヨリノ收入ニ依頼シテ一家ヲ維持スルアリ  
書家、町人、及ヒ浪人ハ多ク此内ニ屬ス  
資産家ニシテ即チ家祿ヲ食ミ若クハ餘財アリテ他ニ本職アルモノアリ

幕臣、藩士、隱士、醫者、神主、僧侶等ハ此内ニ屬ス。無資又ハ薄資ニシテ生徒ヨリノ收入金亦不足スルヲ以テ他ニ内職ヲナスモノアリ浪人町人及ヒ幕臣、藩士ノ小祿ナルモノ(隸卒ノ輩)モ此内ニ屬ス。師ノ身分ニ關シ尙ホ一言スベキモノアリ江戸開市以來御家人輩幕臣ノ薄祿者ハ生活上甚タ困難ナリシヲ以テ此業ヲ始メシモノハ殆ト手習師匠(寺院ヲ除ク)ノ權輿タリトノ説ヲナスモノアリ其眞僞ハ人ノ判斷ニ任スコト、ナシ町家ニ於テハ父兄タルモノ我子弟ノ尪弱即チ病身者アレハ、一ニ手習師匠ノ業ヲ營マシムルニ適スルナラントノ考ヨリシテ遂ニ此業ヲ營マシメシモアリシト云フ又婦人ノ師匠ノ如キモ前ト同シク病身者アリ、或ハ多年屋敷奉公ヲナシ町家ニ嫁スルヲ厭ヒテ(良縁ナキヲ云フ)之ヲナスモアリ又或ハ寡婦モアリ比丘尼ニモアリタル等亦幾何ノ云々アル輩タラザルハナカリシモノ、如シ

〔二七七八〕わすれのこり

日本橋佐内町に、中興兵衛號石水といひ、手跡の指南をなす、弟子男女五百人に及ぶ、人となり嚴にして和顔を見せず、弟子師に面するときは寒からずして粟すしかれども書法を授くるに及びては、叮嚀なること慈母の幼兒を扱ふごとく、こゝに於て、人々其子をこゝに頼む者多し、

(註) 「雷師匠」の條

〔二七七九〕あすか川

昔手習の町師匠も少く、數へる程ならではなし、今は一町に二三人づゝも在り、子供への教へ方あるか、幼少にても見事に書也、

〔二七八〇〕傾城酒呑童子

年頃六十餘りの女房は、柳の馬場のあこうと申し綿つみ教へる寺子とり

十二と三になる弟子が二日に二人の行方知れず、お慈悲に御詮議給はれかし人の小娘失ひて、未來のつみ綿親々の恨みはさながら眞綿にて、首締めらるゝの思ひなりと涙を流して訴へける、

(註)「東寺の西口茨木がつかむ八百兩の金札」の條

〔二七八一〕世間娘容氣之卷

おもての柱に女筆指南のはり紙して、近所の女子をあづかり手習を教へけれど、俄に弟子もあつまらず、

(註)「百の錢よみ兼る歌好の娘」の條

〔二七八二〕享保通鑑卷四

此妻女者三十三、容儀十人並に越へ、小娘共を世話いたし、手跡人に勝れたるゆへ、手習に娘ども通ひける、召仕男女二人有、中に下女は去年暇を出し、

其代りとして近隣より十五歳になる女子を當年やとひ置ける、下男上州者にて廿三歳になりけり、略中此男前に無筆なるに妻女の手本を貰ひ、漸假名まじりのにじり書をもしたり、

〔二七八三〕あすか川

後家の一人ぐらしは御法度の由承る、遊女町杯には折々見へもする哉、然るに近來は素人の町家、後家の方ぐらし能と見へて、多く町々に有り、女筆指南も多し、

〔二七八四〕文化秘筆卷二

其方義幼年ノ節、浪人手跡指南致候山田雲門方へ内弟子ニ参り、其後養子ニ相成、養父隱居致、身上向弟子等ヲ譲リ請引ツ、キ手跡指南イタシ、幼年ノ節ヨリ養父母ヲ大切ニ致、成人ニシタガヒ別テ孝養アツク心ヲ用ヒ、其

方ハ龜服ヲ著シ、養父母ノ朝夕喰物等、養父氣性至テ烈シキヲ程克アイシライ、何事モ逆ヒ候ギ無之、養父母ノユルシテ不請ニ他行イ、タサズ、毎夜養父母臥候迄機嫌ヲ取、深更臥シ早朝ヨリ起、自分ニテ食事ヲ拵エ、養父母目覺候ヘバ茶多葉粉等心付、食事ヲ進メ、給仕ヲ仕廻、後ニテ其身家内一同ニ食事致、弟子共ヘモ孝道ヲ教候故、追々弟子モ多ク相成略下

(註) 文化十四年十二月二十九日、浪人山田太一への仰渡書の一節

〔二七八五〕寺子屋物語

ある里にあやしの寺子屋ありけり、たけべ何がしとやらん京家の青ざふらひの末葉なりとかも、とより味噌のあがりにて世にいふなまくらなれば、文字の由來かなのつかひかたはさら也、かのちくらの沖にたゞよひし舟のごと、何流とも見わけがたき愚筆なれど、外に覺えたる藝もなく、將商ひなどすべき元手もなければ、鐵面皮とは知ながら、誠に是非なき口過に

こそ、されば其ほとりにすまひする人々打寄ていふやう、近き頃こゝに來りすめる風來人、いづくのはての馬の骨やら牛の骨やら、素じやうはさらにならねど、世話する人もあれば尻に帆かけて夜逃する程の事もなからんか、さすれば、たがひにもてる子どもらに、てらいらせんといひあはせて、一人のよみけるは子に對する心なるべし、

手習をさするは親の役ぞかし、成長ののちけしてうらむな、といひ出ければ、其人に對してまた一人のよみける、必竟は錢がいらねば習はする、たんとかゝらばならはせはせぬ、となんよみけるに、又一人のいふ、我も大かた同じ心也とて

内にゐて四文々々がうるさいぞ、師匠へやれば其うちがらく、とよみ出、おのゝうちとけてかたりあへる中に、いさゝか世才のあるものゝいひけるは、我もあげまきのときおやのいひつけにて、手習せし事ありとて

名がしらと江戸方角と村の名と商賣往來これだたく山、かくよみけるをば、いづれもかん心して、かく別の物しりなりとぞ評じける、

〔二七八六〕鷹塚談  
下之卷

祐筆手習師匠に一向に文字をしらず、短日を丹日と書の類多し、故に筆は錐を立るか如し、左清右濁の書法もさらに辨まへず、永字八法なと有事は夢にもしらすして、彼は何流、是は何流と、區々にいかめしくいひ罵り誇り、師匠となり、または祐筆となり、仕官するも多し

(註) 「江戸自慢の異同」の條

〔二七八七〕當世宗匠氣質  
卷之二

津の國のしるべを頼に落着所は老松町の裏合せ、砂原といふ所に三井寺

の出家落望月春永かひなくしく取持て、邊り近所の遊民衆と談じ寺子やに取立ふといふと、早老松町に家かりてあてがい、ソレヤ師匠様宗匠とあふぎ立る道風もどきの御能筆、四座でも天鼓みぢん言はふ處のない鼓の御名人じやと、よつてかゝつて世話する連衆がかけ廻りて、爰にては三人かしこからは五人七人、かりもやうしひろひ集るやうに、わんぱくざかりの子ども一兩月の内に四五十人の弟子つきて賑へば、追付百人貳百人に足たらそれこそ梅がえ寺やと仰がれんと心頼母しきすべて世の人心、世話する日にはなげうつて如在じよさいもなふかけ廻り、田もやる汗水に成て手傳ひ、障子をはるやら襖の繪をかきに遣る、疊の表かへ、掛物はこちからおこそ花生はソレ貴様にある、二重切くが壹文を四五文がの買て置きや、ヲツと心得高く、り、先宿老殿の息男をふづくり寺入さすりや、丁代が弟もたまられず御指南たのみ存ると、顔づくで銀壹兩髮結にあぶらかけて頼んで、御心安いおかた故殊之外御發向なされると丁内で評判させ、大鼓打

てまはる下役に酒のか臭せばおり／＼来て、御用は何も御ざりませぬかと見廻りてごもくほかしてくれると若い衆の遊び所、まつさら付けても去ぬからして高家ちんも苦にならず、今此太郎も四五十人の子供のかげで寺やの竈はにぎはひにけり、難波の梅いろは書子をちりぬるにならぬやうに穴見つけて心付してやるたのもしさ、さすが繁花の地で氣がひろいかとおもや、ちつとした事で心いきがちがふたと見ると見限るもはやい連中からだもくすゝめるやうに、すゝまぬ若い衆をたゝきつけて鼓のけいこさせけるに、此太郎がかたのわるさ世間一とう觀世流の上が、りはやれば今春ではしか／＼弟子も付ぬゆへ、望月を始として矢矧長左衛門安宅關助簾屋梅藏など取立る師に、當世の氣を教へるでは御座らぬが、なんと宗匠その下掛は取置で、今行れる觀世に仕かへなされ、さふなふてはしか／＼弟子も付まいし人寄りも有りにくかると、最負からせい一ばい心付するに、此太郎は今春流義を立ぬくうたひの經宗、いかな／＼

今身より佛心に至るまで、肝眞能たもつ宗旨をかへるは師家への不孝と理屈ばかりで、どの様にいふて聞してもかぶりふつて合點せねば、せんかたつきて人々は何がちやう／＼しければ、世渡りを知らぬうつけめあんだら／＼として居る所ではあるまいにと此太郎を見限りて寄り付ず、餘人の行のまでとめて廻る、爰に大橋養覺といふ簞醫、さじ先より筆尖がよふまはると連中から取立て隣町で寺やを始させ、此太郎かたの手習ひ子を残らずあげて養覺かたへ遣らせけるぞ是非なけれ、

(註) 「世盛りの身代粉に碎いた病付の樂舞微塵」の條

「一七八八」伊波傳毛乃記

京傳は寶曆十一年辛巳秋八月十五日、深川木場なる典物鋪に生れたり、是年三十歳なり、馬琴は明和四年丁亥夏六月九日、深川淨心寺近邊なる武家に生れたり、是年四歳なり、其幼少の日各居る處遠からず、僅に相去ること數町に過ぎざれど

も、其とも蒙師も同じからず、京傳は手迹を深川伊勢崎町邊なる御家人行方角太夫に學びたり、この人は三井親和が高弟なりき、且つ武家と町家の差別あるを以て、相識らざること二十餘年、この日各舊里を告るに及で、互に拍掌してもて奇遇とせり。

〔一七八九〕小兒必用養育草 卷六

和俗近來、童をして、手習師匠にまかせて手習をさする事なれば、その勤方は、その師匠の教にまかすべきなり、又ちかき比は、女の童をも、七八歳より十二三歳までは、手習所につかはすなり、これはなほだ悪しき風俗なり、七歳よりは、男子と女子と、席を同じくすべからずとこそ、古聖のいましめ給ふに、かく外へつかはして、男の童と、ひとつにまじはる事あるべからず、元より手習師匠も、その事をさとりて、男の童と女の童とは、間所を隔て教るといへ共、その所せばければ、ひたすら男の童のなす所を見馴、をのづとなれうつりてあしきなり、

〔註〕「男女の小兒に教誨の説」の條

〔一七九〇〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書 第七

男子ノ坐席ヲ男坐ト云ヒ女子ノ坐席ヲ女坐ト云ヒ、各當番ヲ設クルハ勿論、帳簿其他ニ至ルマテ男女ヲ區別スルヲ多シトス、而シテ男女共ニ毎日ノ坐席ハ略々定マレルコトは前已ニ述ベタリト雖モ生徒中爭論ノ常ニ絶ヘザルモノ、如キハ更ニ坐席ヲ變更離隔セシムルヲ常トス

〔一七九一〕當世社選商

先づ弟子入が金百匹ぼんに百疋暮に百ひき一年あはせて金三万つぶ都合を小ばんになをした處がてうど七千五百兩也

〔註〕「一日師匠」の條

〔二七九二〕寛保延享江府風俗志

子供手習寺上りは、赤飯煮、酒肴目録、或は百疋、身分相、應金銀一二兩子供は麻上下親羽折袴にて、一番弟子より次第して、羽折袴羽折計にて、是も身分相應に衣服改めて座に付、件赤飯各々面々菓子盆にて出て盃廻し、尤師匠始め寺入の上り子に遣し、又師より一番弟子へ盃遣し、夫より上り子にさし返盃にて、段々弟子不殘盃廻り、小謠三番納には高砂にて濟、女子も此日は衣服改手間休、知人に成事なり、今より見れば甚正しき事也、夫故に至て輕き者の子供は、寺入おつくりにてなりがたき故、無筆多く有し事也、就中職人は無筆不算にて有し事也、然るに延享末寶曆頃より、手習師匠甚下れつに成、何様成者にても謝禮甚輕く、蒸物酒肴杯も不入、弟子入其身其儘にて禮式等も無く、甚心安く濟事にて、大安賣の師諸々に多く成し故、何様の輕き者の子供も、寺入成安く成し故、今は無筆は稀也、是は甚能事也、女子は猶更無筆多かりし事也。

〔二七九三〕泊船集 卷之六

手ならひの師匠へやるや大根引

知足

(註) 冬の部「大根引」の條

〔二七九四〕本居宣長日記

自元文二年○時年 八歳八月手學於西村三郎兵衛殿所也。

〔二七九五〕戯作六家撰

明和六年といふとしの二月ばかり齡九歳といふに師のかどにいりたちていろはもじ習ひそめし時親のたまはりしふづくゑなむ此つくるにとありける

(註) 「山東京傳」の條



〔二七九六〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書第十三

入學ノ年限ハ早キハ五歳モアレド通常男女トモ、六歳ヲ多シトシ、七八歳之ニ次グ、九歳以上ニ及ベハ已ニ晩シト稱スルニ至レリ、然レドモ稀ニハ十歳以上ニシテ入學スルモノアルハ今ト異同アルナシ  
退學ノ年齢ハ前ニモ述ベシガ如ク、男子ハ一般ニ早ク退學シ、即チ十一歳ヲ多シトシ、十二歳十三歳ニ及ベハ亦陸續退學セリ、故ニ十四五歳マデ就學スル者ハ百中二三ニ過ギザリシト、女子ハ十二三歳ニ及ベハ退學スルモノアリト雖モ十四歳ニ至リ退學スルヲ多シトス而モ十五六歳マデ就學スル者百中五六ハ之アリシト

以上ニ據リ就學年齢ハ男女共ニ短キハ凡三年長キハ七年ニ及フモ平均男子ハ凡四年間、女子ハ凡五年間ヲ多シト云フモ甚シキ誤謬ハ之ナカルベシトス

以上ノ學力如何ヲ辨ゼンニ、入學ハ概ネ初メテ入學スル者ノミニシテ且轉學者モ甚タ少キヲ以テ之ヲ辨スルノ要ナシ、退學ノ學力ハ或ハ年限ノ多少、或ハ性質ノ銳鈍、或ハ勉不勉等ニ據リ懸隔相違アルハ勿論ナレドモ多年通學、消息往來ヲ學ブ頃ニ及ベハ稍々讀書ヲナシ、算術モ加減乗除ハ差支ナキニ至ルヲ多シトス、自分用ハ略々之ヲ辨スルニ至レルコトハ前已ニ之ヲ述ベリ、此輩今ノ略々尋常科卒業ニ比敵スルヲ得ベシトス  
又六七年モ就學スル輩ハ算術ハ勿論、女子ニアラズ、傍ラ漢籍ヲモ繙クヲ以テ、其師之ヲ授ケザレハ他ノ師ニ就キテ學ブモノトス、讀ミ書キノ一點ニ至リテハ今ノ高等二三年ニ比較スルヲ得ベシト謂フベシ、然レドモ稟性鈍ニシテ假令消息往來若クハ庭訓往來ヲ習フニ及ブモ應用ノ才ナク、却テ江戸方角若クハ商賣往來ヲ學ビ居ル輩ヨリ劣レルモノモ間々之アリシト

〔二七九七〕東都歲事記卷之壹下

此日小兒手習讀書の師匠へ入門せしむる者多し

いの字より習ひそめてや稻荷山

其角

(註)「二月初午」の條

〔二七九八〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書第十

起業終業時限ハ時辰儀ナカリシヲ以テ幾何ノ遲速アルハ免カレザリシト雖モ或ハ日晷ヲ見或ハ鷄鳴ヲ聞キ以テ之ガ時刻ヲ計リタリ而モ曇天雨天等ニハ往々時刻ヲ辨スベカラザルニ至リ常ヨリ早ク退散セシムルコト多カリシト云フ抑々授業時間ハ毎日六七時間ニシテ七ツ習ヒト稱スルモノ、如キ師家ニ依ルニテ一般ニハアラズハ殆ド八時間ニ垂ントセリ其長時間ナル驚クベシ而シテ起業時限ハ毎朝出席スル者ハ直ニ習字シ始ムルヲ以テ何時ヨリ等ノ定メナシ然レトモ五ツ時(今ノ七時半頃ナラン)ニ始メ八ツ時(二時半頃ナラン)ニ終ルヲ通常トス即チ今ノ六時間

ニ相當スト雖モ其實五ツ時前ヨリ出席スル生徒少キニアラザレハ其實七時間以上ニ涉リシナリ前條ノ如ク起業時間ハ定メナキモ終業時限ハ定メアルナリ即チ通常八ツ時ナルヲ以テ生徒ハ時ニ拘ラズ退散時ヲ目シテ御八ツト稱スルモノ間々之アルハ今ノ休日ヲ目シテ日曜ト誤リ今日日曜申候トノ奇談アルト同一ナリシ

〔二七九九〕浮世風呂二編卷之上

巳どこのもお辨當でこまりますよ、辰ハイサ、もううるさくてなりません、いかなことでも、お辨當が遅いと宿まで取に参りますはな、さうしてえつさらおつさらお師匠さまへ持行ってたべます、巳ハ、、、いへ又雨降風間には、轉んだり何角致さぬで、お辨當も能ございますが、お菜がなんだは角だはと望み好がうるさうございますよ、

〔一八〇〇〕浮世風呂  
前編卷之下

子供大勢かほも手足も墨だらけ、くろんぼうのごとくになり、目ばかりひからして、どやどやと入來るは、手習から八ツさがりと見ゆ、

〔一八〇一〕本居宜長日記

西村ニテ習物 いろは、加名文、教訓之書、商賣往來、狀、

同所ニテ習シ千字文 天地八才ノ、玄黄九才ノ、冬藏九才ノ、李柰十才、草木十才

外受十一才、謂語十一才

〔一八〇二〕本居宜長日記

齋藤ニテ習物 今川、國名、人名、手習訓書、狀、江戸往來少シ習

同所ニテ習シ千字文 篤初誠美十二才、散慮逍遙十二才、曠遠綿邈十三才、絃歌

酒譙十三才

〔一八〇三〕上野人物志  
下

如圓幼名を半兵衛と稱し、年僅かに十四歳にして、近隣の兒童を集め、手本を與へ、習字せしめ、或は實語教を講ぜり、天保元年に至り、隣里半兵衛を推して師と仰ぎ、兒童の讀書手習の指南を乞へり、

(註) 「國學歌人青木如圓」の條

〔一八〇四〕經濟錄  
卷六

小學トハ在所ニアル小キ學校也、是ニ入學シテ六甲、五方、書計ノコトヲ學ブ、六甲トハ、十干、十二支也、甲子乙丑ノ類也、五方トハ、東西南北中央ノ名ヲ云フ、書ハ、書藝也、モノカクコトヲ學ブ也、計ハ、算數也、是童子ノ學業ニテ、八歳以上ノ者ノ習フ所也、是ヨリ稍々ニ長幼ノ節ヲ知ル、今ノ世ニ七八歳以上ノ童子ヲ師ノ所ニ集テ、物書クコトヲ教ヘ、小謳ヲ教ヘ、今川狀、庭訓、式目ナドヲ讀シテ、九々八算ナドヲ教ル如ク也、

(註) 「學政」の條

「二八〇五」さへづり草むしの夢

童の手ならふ本に何往來と名づくるもの多くなかに往來の名のかなはざるものもあり、此往來もの、うち庭訓往來は、元弘四年玄惠法師の作るころなれば、これを往來もの、鼻祖といふべし、商賣往來は元祿年間、京の人堀流水軒と云る手習師匠の著作のよし、東牖子四の卷に云り、醒齋は元祿以後のもの也と云り、龍田詣といふものは近松門左衛門が作るころなりとぞ、

(註) 「往來」の條

「二八〇六」笈埃隨筆  
卷之七

予九州に有し時、宿の小兒に初めて手習させんと手本を書て得させよと

いふ、則かのいろはを書てあたふ、その親のいふ様、上方は手習の初には、かくいろはより學び候哉、去にても、此邊ははるか片田舎なれば、時世の風俗の傳へがたきゆへにや、恥かしき事也と云、しからば何なる事を此邊にては書初るやと問へば、難波津に咲やこの花の和歌と、淺香山影さへ見ゆるといふ和歌二首を習はしむと聞て、實も源語の中、近くは蘆刈の謠曲の中にも出たり、故ある事哉と感じ、頓て二首を書て與へけり、

(註) 「以呂葉」の條

「二八〇七」塵塚談  
下之卷

嫁娶の節、祝言に小謠の事、我等若年の頃迄は、庶人町家の婚禮に、親族盃事の時には、必ず一座の者小謠を諷ふ事、定式にて有けり、近歲小謠の沙汰絶てなし、田舎にはこれ有事もあらんや、是等の故にや、其比の小童の手習師匠は、稽古終には小童に謠を教ゆる事、一統に有しが、略

〔一八〇八〕有徳院殿御實紀  
附録卷十四

千住驛の邊の御狩に、島根村といふ所に吉田順庵といへる村醫あり、そが家に童子どもあつまりて、手習してゐたりしが、わたらせ給ふと聞て、みなにはかににげかくれ、手習の草紙、机など引ちらして有しかば、何を手本にかきてあたゆるにやとて御覽じければ、御鷹場法度證文なり、公法を童にしらしむる事、奇特なる事なり、村々へもよく申聞せよと仰ありき、次の日伊奈半左衛門忠達を召て、彼順庵に白銀十枚を賜はり、さて六諭衍義大意一部を下され、この後は村の子どもに、これをかきてあたへよと仰下されしとなり、其書の帙、表紙までもうるはしくなして賜はりしとぞ、これ村中の者に、篤信の心を興さしめむとの御旨とぞ聞えし、

〔註〕 享保六年十月廿八日の條

〔一八〇九〕經濟問答秘録  
卷四

又寺子家ノ師ハ、始メ實語教童子教等、佛道主意ノ書ヲ教ヘ、其後庭訓往來、辨慶狀、義經狀、風月往來、江戸往來等、庶民ノ身ニ何ノ益ニモナラザル者ヲ、唯案文ヲ主トスルユヘ、年長ジテ案文ニ工ミニシテ、口事訴訟ノ因トナルハ、元來其教ユル所ノ師匠ニ在ル事ナリ、適富有ノ孩兒ハ右ヲヨミ終ツテ、大學論、孟中庸、是ヨリ書經ト素讀シ、朱學ノ法ヲ堅ク守レドモ、是亦了簡違ナリ、大學、孟子、書經等ハ、天下國家ヲ守ル王侯大夫ノ書ナリ、庶人ノ身ニシテ之ヲヨミ、等ヲ踰テ何ノ益有ルコトゾ、

〔註〕 「本朝諸國釋奠式」の條

〔二八一〇〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書  
第四

師家用具 師用ノ机、教授用ノ長机、書籍（手本下）本箱、太小數種ノ筆、大小ノ硯、朱丹及ヒ硯（太筆、大硯等）ハ、席書ノ際使用ス、標札、橋木、水桶、鞭、生徒姓名札、漆塗掲示板、大火鉢（冬期）出席帳等、

右ノ外毛氈、茶碗、土瓶等家事向ニ涉ル具ハ略ス

生徒用具 机、硯箱、筆、硯、墨、水入、文鎮、手本、雙紙、清書、雙紙、白紙、手帳、萬年紙

(黃色ノ漆塗紙ニシテ使用上今ノ石盤ト同ケレトモ墨汁ニテ認ムルナリ故ニ多ク行ハレザリシ)書物、算盤、ブンマハシ

同附屬品 風呂敷、襪、履物即チ雪踏、草履、下駄、草履、木履、下駄、傘、日傘(紙製

ナリ、雨天傘モナリ)笠ハ竹皮菅笠等アリシモ男子ニシテ之ヲ冠ルハ炎天ニモ稀ナリトス

同衣服 通常ノ服筒袖ハ之ナシ袴ハ士ノ子弟ハ之ヲ穿ツモ他ハ稀ナ

リ、儀式ニハ男子ハ袴羽織ヲ着用スルモ、女子ハ袴ヲ着用セザリシ、男子ノ帶ハ角帶ニシテヘコ帶ナシ但シ多ク前掛ヲ施セリ

野卑ニ涉ル風ハ禁シタリ例セハ男女亂髮及三尺帶、女子ノむすび髮等

〔一八一二〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書 第七

新タニ入學スル幼年生ハ兄姉又ハ近隣ノ知友アレハ其者ノ隣席ニ机ヲ据ヘ、此輩ヲシテ習字ヲ授クル補助且世話ヲナサシム、若シ知人モナキ際ハ、當番ノ者之ヲ擔當ス(當番一名ニ付三四名ノ幼年生ヲ監理ス)而シテ其上ニ立チテ幼年生ノ監理ヲナセシハ師ヨリ寧ロ其妻タルモノ之ヲ負擔スルモノ、如シ

幼年生ノ雙紙ヲ習ヒ終ルニ及ビテハ(其實他ノ者之ヲ習フナキニアラズ)自席ニ於テ隨意ニ遊戯ヲナサシメシト

〔一八一二〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書 第六

習字科ノ教授法ハ毎日(生徒多數ナレバ隔日交代ニ教授ス)生徒三四名若クハ五六名ツ、師ノ面前ニ呼ビ出シ、交々筆法ヲ授ケ兼テ手本ノ讀方ヲ教ユ、其五六名ヲ同時ニ教授スルガ如キハ煩勞ナリト雖モ老練家ハ敏捷ニ教フルヲ以テ、生徒モ手ヲ空フスルニ至ラザルハ太古、麻戶皇子ノ同時

ニ八人ノ訴訟ヲ聽斷セシト云フノ觀アリト謂ハンモ過譽ノ言ニハアラザルベシ、尙ホ茲ニ奇談トスベキハ師タルモノ往々倒マニ文字ヲ書スルニ熟達スルコトニテ今ノ教師ノ企テ及ブベカラザルモノアリ、是レ常ニ生徒ニ面シ師ニ對シテハ文字倒トナル筆法ヲ授ケ即チ倒書スルヲ以テ知ラズ識ラズ此ニ至レルナリ故ニ三四時間ニシテ少キモ三十人、多キハ五六十人ニ筆法ヲ授ケ終フベシ、若シ師ニシテ倒書ニ未熟ナランカ到底斯ク多數ノ生徒ヲ教授シ能ハザルハ勿論タリ

然リ而シテ師ノ面前ニ呼出シテ筆法ヲ授クルハ多ク双紙ニ手習シ居ル者ヲ限レリ、是レ白紙ニ手習シ居ルモノハ字數モ多ク、隨テ長キ時間ヲ費セバナリ、故ニ白紙ニ手習スル者ハ時ニ御直シト稱へ、之ヲ差出サシメ朱筆モテ筆法ヲ授ク即チ拙字、誤字等ヲ正スナリ

又或ハ前條ニ據ラズ、師タルモノ終日或ハ佇立、或ハ巡回殆ド絶間ナク、一隅ノ生徒ヨリ順次筆法ヲ授ケシモアリト云フ、此際往々師ハ鞭ヲ携フル

モ或ハ身體ノ疲勞ヲ防グガ爲メ之ガ杖ノ代用ヲナセシヤモ亦未ダ知ルベカラズ

要スルニ教授ノ方法ハ家々其異同アリシハ勿論ト雖モ專ラ筆跡教授ニ意ヲ用ヒシニ至リテハ一ナリ

〔一八一三〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書第六

習字ニ就キテ云ハ、生徒ノ未タ拙字ナルニモ拘ラズ、自己ノ力ニテ文字ヲ書シ得ルニ至レハ(今ノ二年生ニ相當スベシト云フ)清書双紙ノ表紙等ヲ認メシメ稍々進ミテハ帳簿ニ出席生徒ノ姓名ヲ記入セシメ、時ニ其認メ方ノ整否ヲ檢シテ指示スル所アリシト

〔一八一四〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書第六

讀書及ビ算術ノ教授法ハ所謂不慎不啓、不排不發即チ開發的ノ教授ヲナ

スモノアリシト雖モ誨而不倦ノ語ヲ固信シ、多クハ注入的教授法ナリトス、然レトモ其器具等不足ノ當時ニ於テハ概シテ巧ミニ教授シタリト云フモ蓋シ溢美ニハアラザルベシ

讀書即チ實語教等ヲ一般生徒ニ授ケシ方法ヲ述ベンニ午前若クハ午後、退散時刻ニ先ツ凡一時間、生徒ヲ一所ニ蝟集セシメ、若クハ机ヲ取片付シメ然後生徒ハ圓形若クハ方形ニ坐セシメ當番ナル生徒ハ交々之ガ音頭ヲ爲シ一句ヲ讀メハ、衆生徒之ニ和シテ誦讀シ、即チ齊讀ニテ一編ヲ誦讀シ了レバ直チニ退散セシムルナリト、乗算九々ヲ讀マシムルモ亦之ニ準セリ、又禮式等ヲ授クル際モ衆生徒ヲシテ方形若クハ圓形ニ座セシメ然後之ヲ教授シタリト云フ

〔一八一五〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書

生徒ノ習字シ終ル毎ニ一人ツ、雙紙ヲ點檢スルモアリ、又午前午後共ニ

退散ノ前ニ方リテ齊シク之ヲ點檢スルモアリトス、而シテ其不都合ナル者ハ更ニ命シテ習ヒ改メシム、此事能ク行ハレシヲ以テ生徒亦能ク習字シタルナラン、而シテ此ヲ擔當スルハ多ク當番ノ任ナリトス

〔一八一六〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書

毎月末一回已ニ習ヒ終リシ手本ノ讀後及ヒ之ヲ誦書セシメシハ今ノ小試験ノ如ク、毎年末一回(十一月中、幾日間ト定ムルモノトス)大浚ト稱シ、少キモ數本多キハ數十本ノ手本ヲ誦讀及ヒ誦書セシメシハ今ノ大試験ノ如クナリシト云フ、今日口碑ニ存スル、大浚、小浚、手本取ラレテ泣浚トハ此事ノ謂ヒニシテ當時生徒ノ困苦以テ想フベシ、サレハ大浚前、數日間ハ生徒一層ノ奮勵ヲナシタリトハ古今其趣ニ於ケル異ナルナシ、今其狀態ノ略ヲ述ベンニ、多年通學セル生徒ハ日々數十本多キハ五六十本ニ及ブトノ手本ヲ携ヘ來リテ、中ニハ其多キニ誇ルモノモアリシト、而シテ大浚ヲ



ナスニ際シテハ師ノ面前、數人ヲ呼ビ出シ當番ハ左右ニ坐シテ之ヲ補佐シ當番一人モテ生徒一人若クハ二人ノ手本ヲ取り上ケ然ル後之ヲ諳書セシム(用紙ハ清書雙紙ヲ用フルモアリ更ニ之ヲ調製スルモアリテ細字ニテ認ムルナリト)其多數忘却セシ者ハ自己ノ坐ニ復シテ溫習セシメ、更ニ呼出シテ之ヲ諳書セシムルナリト、其拔群ノ生徒ニ至リテハ庭訓往來ヲ諳誦シ、消息往來ヲ諳書スル者アルニ至リシト、右畢リテ、今ノ及落ヲ判スルト等シク、其成績ヲ教場ニ掲ゲ、優等生ニハ賞品ヲ與フルヲ常トセシト云フ

〔二八一七〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書第七

出席帳簿ハ當番生徒之ヲ扱ヒ當ニ生徒ノ出席順ニ依リ記入スルノミナラズ當番ハ教場入口ニ坐ヲ占メ、生徒昇降ノ禮儀ヲモ注意シ(お早よう、只今、さやうなら等唱へシムルモアリ)殊ニ退散ノ際ニハ意ヲ用キ、徐々一人

ヅ、帳簿ヨリ姓名ヲ呼ビ(お呼出シト唱へ、呼ヒ方ハ誰サントノミ云フモアリ誰サンお歸リト云フモアリ)テカノ角力呼出ホドハ長時間ナラサルモ呼聲短キニアラズ故ニ雜沓ノ憂ナシトス)テ退散セシム

又生徒中缺席スル者アレハ他ノ生徒即チ其他近傍ノ者分擔之ヲ訪問セシムルコトモ亦當番之ヲ擔當ス、而シテ生徒ノ缺席ハ豫メ前日之ヲ届ヲ出デシメタリ但シ多ク口唱ニシテ書面ヲ要セザリシ

要スルニ出席缺席ノ調ハ甚タ注意セシナリ、是レ出席多數ノ生徒ヲ特ニ賞スルコトモアルベシト雖モ寧ロ兒童ノ師家へ通學スル爲シテ通學セザル者時ニ之ナキヲ得ザルノ弊ヲ防遏スルノ意ニ出デシモノ、如シ即チ其通學ヲ厭フ兒童ハ途ニ遊戲シ、雙紙ヲ濕スニ用水、若クハ河水ヲ以テシ通學セシ者ノ如ク裝ヒ、以テ時刻ヲ謀リ歸宅セシナリト云フ

師家ニ備フル帳簿中、出席帳簿ヲ除キテハ會計帳簿アルノミ、其他教授上手控帳簿モ多少之アリシナラント雖モ今之ヲ審ニスルニ由ナシ故ニ之

ヲ略ス

〔二八一八〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書第七

生徒ハ終日(今ノ六七時間ナリ)机ニ几リ容易ニ席ヲ離レシメズ若シ要用アリテ席ヲ去ラント欲スルトキハ師匠若クハ當番ノ許可ヲ經ベキモノトス、故ニ生徒ハ往々退屈ノ餘リ、御小用ト唱ヘ(便所へ行クヲ云フ)之ヲ口實ニシ散鬱ヲ兼ネ一遊戲ヲ試ントスルモノ毎ニ之アリ、サレハ亦此弊ヲ防遏センガ爲メ、豫メ木札ヲ製シ置キ二三人或ハ一人ヲ限リテ之ヲ小用ニ行ク者ニ貸與シ、其席ニ復ルヲ待チ、更ニ之ヲ他生徒ニ貸與シテ其席ヲ離ルヲ許スモノアリ、故ニ便所ニ行キテ戲レヲナシ若クハ便所ヲ汚スノ憂ハ少シトス、其甚シキハ當番ノ者、生徒ニ附添フテ行キ其眞ノ小用ナルヤ否ヤヲ檢スルニ至ルト

〔二八一九〕寺子屋物語

机に向へど、ろく／＼墨もすらず、たッ筆になぐれば草子は夕立にあひし衣の如くぬれくさり、はては引裂とりて成たけ紙數をへらし、或はくび計りの武者、足のなき馬又は傘の下にたれそれいろ／＼、なんど書ちらし、筆は摺子木の如く、硯はすり鉢の如く、手本はするめの如くあらめに似たり、

〔二八二〇〕浮世風呂前編卷之下

ばんとう「コレしづかにしねへか、此子どもは騒ぐ／＼しい、武部源藏さんの手習子は皆いたづらだ、ヤイ靜にしねへか、ソリヤ番頭が始つたイ」皆がお無言だよう

〔二八二二〕寺子屋物語

師匠をしえていはく

稽古處へ來るも歸るも道草をくふて互につかみあひすな、  
 精出して修行をしてもかけぬもの、そらうそぶきてなにが出来るぞ、  
 今のうち心を入れて習ふべし、年取てから出来ぬものなり、  
 むだ口やはしり書せし其上に、習ふふりして双紙はぬるな、  
 人の事いはずとおのがあたまなる、蠅追ふて手を覺ゆるぞよき、  
 よき事に出すべき慾をさはなくて、のみくひに錢つかひたがるな、  
 どぶを飛竹馬にのり鬼ごつこ、かくれんぼうにかぎざきをすな、  
 かくよみ出で、日々さとしをしゆれど、師匠が例の御談義かと、馬の耳に  
 風とやら、どこをふくかといふ顔にて、さらに平氣の平左衛門、中々目口の  
 放されぬ家業、實に因果の渡世ぞと、さすがのおれも小刀のまがりもあき  
 れはてたる計也、されども師匠の役目なれば、おのれが學びし其むかし、師  
 匠にいはれし數々を古事に引出し、いひきかする略○下

〔一八二三〕浮世風呂  
前編卷之下

翌あしたまた留られやうと思つて、お師匠さんに云告てやらア

〔一八二三〕笹山梅菴寺子制誨之式目

一人と生て、物かゝさるは非人、是を亡目に縦たてたり、且は師の恥、且は親の恥、  
 都て其身の恥辱也、三子の心、百までと云り、志を起此恥を不忘、手習可被  
 情出事

一善悪は、友によるの間相互に、行義を嗜、惡事に、崩おろ氣情を我と責臥て、筆法  
 に、心に移、ならひ可被申事

一机に懸て、無益の雜談、或は欠氣し、延し、或は居眠、鼻を吸、紙を嚙筆の管を  
 嘔く、不習人を、手本とする事極惡人の所業也、人は兎もあれ、角もあれ、其身  
 は神妙に、心を止、一字々々に、よく見入習可被申事

一早書急度令制禁、候惣て氣の短き者の、名人と成たる、様たしなく候間文字律

儀に丸靜に書習可被申事

一卓に泥臂を附指先計にて、陝書し、或は浮虛にて、氣樂に書候ては、手跡上る物にて無之候、筆の持様など違不申候様、字毎に心を碎、筆情髓に、書習可被申事

一筆紙を、放埒に、致し候者は、手揚兼申候、損たる、古毫なり共、大切に、つかふ人は、手跡早あがり候間、筆扱に心を可被附事

附白き紙を、清書等の外に、猥に剪裁費なる儀に、遣捨候儀堅令停止候事

一其身の居候廻に、反古等、不可取散、卓の上硯、文庫の内迄、奇麗可取置且又墨筆翻散候はぬ様可被致事

一着物の、破綻、爲穢が見苦しきよりも、其子の心坐間の、破たる所、被察みるも、右流左之、常々、物靜に衣類等暴、不申候様に相嗜可被申事

一惡腕に、徳ある事なし、戲の、座興長じて鬪諍と成候、唯常、我身の誤を、願、慎

肝要候、且又相撲腕押、枕引等、兒童不似合、力業、堅無用候事

一堀端、川端、井の本、縁際、石壇、登臺、惣て危所にて、狂候事、大不孝にて候、其上身を毀不傷を、孝の始と申候間、身持、自在無之様、相嗜可被申事

一心入の、惡敷者の、能物書事なし、先兩親崇、師道を、尊兄を敬弟を惠より、人の道は發事候へは、禮義を正し、友達中えも、詞葉づかひ以下、隨分、慇懃に可被申事

一先心を奇麗持を以本とす、人の道を學、寺に來る身として、足は泥に穢、兩手は墨に染面體の反古に似たる有様は、ぶ嗜成非物哉、人の惡を見て、我身を省其身を慎可被申事

一寺子の髮の不損前を能合て、帶の結め正敷齒の白きは、器重師道親の心配迄も被察者也、互に此段心を附、無單袴なる身もち、被致間鋪事

一友達は、兄弟とおなじ魚と水のごとく、中能交、萬事爲、人能様と、可被心掛事

一 賢過て、物毎偽を云は可成、盜人、瑞相なり、假染一口も虚言不被申且又少の物成共左禮事にも不可陰事

一人の奢は、口より生ず朝夕の食物、何成共人の與ものを喰食好二言辞、少も不可被申尤買喰等の陋沙汰承及候は、永見限可申事

一 寒と、卑隋涙を、堪忍して不習は、手跡あがり不申候間、溢て不可飽食、且又心の卑敷事、口より露候へは随分長鋪、相嗜人の手より、不與ものは、不可

食事

一 懈者は、食を急、爲疲猿木實を如食と、古語に見へたり、不情成子の癖として、食事無遣脊、又無吞度、湯茶を好、無居度、小用立物に加合附て、遊狂ふ其心の蓬、賤き事縦るに物なし、嗜て尋常に、恥知可給事

一 子共の、莨蕩を吞酒飲、好て湯水を、細々吞候者を、可愛がる人、無之候、人に憎る、者は、終蒙天罰、被爲愛人輩は、神明預加護事、目前候、是に不限人の憎を、請候儀少にても被致間鋪事

一 欲物は、品により、物により可被致所望候、白紙一枚成とも、其仁に陰し盜取被申候は、生前の可致恥辱事

附於友達中不依何賣買堅、被停止候其外、幼少の子共物貫候儀も可有遠慮事

一 車は三寸の轄以、千里行、人は舌三寸以、五尺身損、烏の色黒は、憎者なし、口の姦敷を憎、是を以、可知無益の雜言、放言、高咄は、乞食非人の境界ぞと、可被心得事

附不問語、告口、差出口、根問、陰言、詞葉咎等急度被停止候惣て人に恥與る宛言、耳研等は悪人の所好にて候事

一 寺に來ては、宿のよからぬ事を白地語、宿所歸ては、己が悪事を掩爲陰、寺をあしさまに沙汰する事、不情なる子共の、常にて候間一口よりつゝ、しみ、可被申事

一人は手もと、足もとに、氣を付事肝要候、龜相走步行候へは、不計過出來候

- 一 條立廻、戸の明立、道具の取直し迄物閑に、筋道不違様と可被心懸事
- 一 縦初にも他人の草履木履、不可履、第一のぶ躑なり、万一似たる故に誤候は、斷を立、急度侘言可被仕事
- 一 無理、非常の悪友には兼々、不可親、若立交候共物毎、不障様に、挨拶可被致候、垣と鬭諍獨不成と云り、萬一、毫合張合、及爭論輩は、双方の、可爲越度事
- 一 堂塔、其外、宿にても、寺にても、洛書堅令制禁候、且又徒に、障子を破、柱疵を付、疊等汚候は、可重其罪事
- 一 諸勝負、寶曳、穴一等壹錢事より、人の心は賤成候間、堅令停止、訖乍去正月十五日より内は品により、少々可致用捨事
- 一 一人の見世、或門前に立寄、物乞、藥商等を見物して、往還共に致道草、師道、親の名を貶輩、以の外の、可爲不覺事
- 一 人はしらじと、夜中野離、或道辻にて小歌淨瑠理、高念佛、大聲上て、世に不禪輩、俗性も、押被計、聞にくき物候、人の不見不聞所者、一入慎可被申事

- 一 女子或己より、年の劣たる者を呵責、諍論仕懸候輩は、寺子とは難申、偏に人に似たる畜類と、可存事
- 一 縦令、如何様の珍事有之候共、何も、一度に不可立駭、勿論小用等にも代々立可被申事
- 一 兩親には、出るを告て歸るを知すべし進退は師命に隨ふべし、万一師の家を賣て、他方に令遊興輩、言語道斷に候事
- 一 人、人、人、人、人、人、人、人と申事候へは、諸人敬、殊弟弟子をば、隨分取立候様に、養育可被仕事
- 一 世話に、若木下は、笠脱と申、又氏より生育とも、申候へは、悪敷友達成共強に、不可憎、却て害成事有之、我よきに人のあしきが、あらばこそと讀し歌も候へは、悪しき友も、麻の中の蓬と成候様に、恥しめ諫言を加へ、可被申事
- 一 他人より己が手跡、いか程勝り候共、謙下して自慢、高慢の心不可持幼少

の時、纔も此心候へは成人の後、大きな立身の障と成候事  
一七尺避て、師の影を不踏、一字恩に、舌拔と云り、主親、師道に、向て一言も、口  
答不可申、制訓の趣、厚信し、彌人の道、重事を尋問、可被申事  
一善を積ば、福を得、惡をなせば、禍來、人として孝を思はざるは、畜生也、道を  
信ぜざるは、木石也、此教訓の愚おろそかに存不用、不信輩、恥を重名を降し、身立所  
を失後悔、可爲眼前、是を則、天罰とは申候事

右此條々、耳に覺口にいふを、能とはせず、唯氣に令懲、心に哲さとし、身に守るを  
以要とし、成人の後、意味深事を、可被察也、梅檀は、二葉の時より、馥かしく、迦陵か  
頻びんといふ鳥は、卵の内より、蒙求を、囀と云り、流石なる人の子と生、徒に、手足  
延し能もなく、無藝不孝、不義の名を蒙諸人に嘲れん、事生々世々の恥辱也、  
一代の高名と、不覺は、面前今日に、有事を、識へし人の放心を納、身を立道を  
得る事、手習より善はなし、但懈る心は、出來易く習ふ心は、妨易し、水流て止  
ざれば、大海となる理を、得心して、一日も片時も、止事なかれ、佛と成、神と成、

聖賢に至るの道も、物事より起、一天四海の、善行、唯一筆に、籠れりと、明に知  
止て、可被致、修行事、肝要なり、者、制誨ていはいの式目如件

〔一八二四〕杉谷祐三郎寺子屋掟

一、親の命を守れ 二、師の訓を守れ 三、早く起きよ 四、教室にて  
は大聲高笑を慎め 五、登校退散の時には師に挨拶せよ

〔一八二五〕維新前東京市私立小學校教育法及維持法取調書  
第七

顔のよしあし きもの、よしあし 家のくらしむきのよしあし  
中うち つけぐち み、こすり たかわらひ 男のうはさ  
たんき わがまゝのふるまい むだぐち  
右は決してなすべからず、そむくものは七時までとめおき候事

〔一八二六〕日本教育史資料

於久世村地内教誡所取立度段其方并杉山順庵塚谷屋助太夫發起イタシ同志ノモノ共エ申談出精取計學館普請成就學術專被行段一段之事ニ候猶往々其方共并目木村三郎左衛門エ重立世話役申付ル間子孫エ申傳學館永相續イタシ候様可取計者也

(註) 美作國「久世代官所立學校」中寛政八年十一月の達

〔一八二七〕日本教育史資料

赤子間引の儀は嚴しく相制し檢見其外廻村之度々乍恐御代之難有儀并五倫の道等小前のもの共え申聞せ猶又儒者等相庸久世陣屋元并笠岡陣屋元寺院におゐて大人小兒共毎月教諭爲仕都て支配村々えも農隙の時節手輕に相廻し教訓爲仕候所久世陣屋元え教諭所相建私庸置候儒者居住爲仕月並の教諭は不及申經書講釋等相催其外學問心掛るものは右教

諭所差出爲相學永く相續仕度由を以志有之もの共打寄教諭所造立仕度旨申立之候に付任其意候所去る卯秋より右普請取掛翌辰年春成就仕當時無怠慢教示仕候其後笠岡村陣屋元の儀も右同様の趣申立候間是又承届置候所去冬より取掛普請仕候

(註) 備中國「笠岡敬業館」中寛政十年五月、代官の勘定所への伺書の一節

〔一八二八〕日本教育史資料

當地之儀御代官様御入陣之度々小前之もの共え御仁惠之儀被仰聞候間連々風俗宜敷相成候所猶又近來小寺常陸え被仰付毎月無怠慢教諭有之候に付彌以町場人氣温順に相成一統靜謐にて小前之もの共家業第一に出精仕在町共追々繁昌仕候段偏に御仁惠之程難有仕合奉存候右に付何卒於當地教諭所相立在町之老若時々集會仕教諭を請亦者志有之候者は家業之透々素讀體之儀相學候様仕度奉存候左候得は往々彌以風俗宜敷



相成御仁惠之程永く忘却不仕何卒永年教諭相續仕候様一同奉願候此段御聞濟被成下候得は難有仕合奉存候勿論教諭所普請入用等之儀は町場身元相應成志願之もの共より出銀いたし猶亦同志之ものも御座候得は不寄多少に志次第差加へ相建候儀にて餘分の入用相懸り不申高割等に者一切不仕候間於小前聊故障之儀無御座候依之書付を以奉願上候

(註) 備中國「笠岡敬業館」中寛政九年八月、笠岡住民二十六人の願書

〔一八二九〕日本教育史資料  
卷二十

天明七丁未年早川明府作州久世縣令とならせ給ひ兼てこの笠岡縣をも治給ふ年ことの秋は御毛見は本よりの事にて麥の成立をもめぐりみそなはず折々各村にて民を集め公けの御恩を忘れず人倫を全くし産子を養育し諸の善行をつとめ悪事をなすましき旨を諄々と教諭し給ふ猶あまねく行届かまほしく思召てかれこれに命し村々は一とせに一たひ久

世笠岡は毎月一度御述作之條教及六諭衍義廣訓のたくひ民の教に宜き書を讀とかしめ給ひ猶四月九月御自身の教諭怠り給わすかゝる有かたき御志をひとみな感服し奉る餘り久世の父老相議りて御教諭をも承りかつ子弟どもの聖賢の書讀習ふ所を立待りて道に志し善にすゝむはしともなさまほしきよしを願ひ學館を建立し典學館と名つくかゝる誠實の御政教公朝に達し丁巳のみな月厚き御賞を蒙り給ふ是を聞まゝに御管内の民歡呼鼓舞して父母のさひわひを悦か如しこれによりて此里の父老もますゝ志を起し久世のことく學舎を建たきよし願ひ待りければまたゝ御許ありて九月八日より事始め冬至の日に棟をあけ程なく清らにとゝのひて敬業館と名つけ待りぬ

(註) 備中國「笠岡敬業館」中「敬業館記録序」の一節

〔一八三〇〕日本教育史資料  
卷二十

文政年中本郡ノ代官山本大膳ナル者教諭三章ヲ草シ回村ノ都度支配下ノ人民ニ示諭シ或ハ村役人ニ書取ヲ與ヘ小前ノ者ヘ讀ミ聞カセシカ其普及セサルヲ憂ヒ教諭所ノ建設ヲ幕府ニ請ヒ許可ヲ得上粟原村上宮ノ神主土屋伊豫ナル者ヲ教員トナシ定日ヲ立テ三章ヲ教諭兼テ子弟ニ經史ヲ教授セシム天保十年之ヲ石和陣屋ノ傍ラニ移シ釋奠ノ禮ヲ設ケ大ニ文教ヲ擴張ス林要藏深町小七郎相續テ教員トナル

(註) 甲州「由學館」中「沿革要略」の條

〔一八三二〕日本教育史資料 卷二十

教諭日朔望、用書、教諭三章、小學孝義錄、右教諭日ニハ陣屋詰合ノ手附手代世話役各村ノ役人小前末々ノ者マテ聽聞ス、教員各村ヲ巡回シテ教諭スルトキハ教諭三章ヲ示ス  
講釋日三八、用書、論語孟子五經ノ内、歴史、六諭衍義教諭三章、右講義日ニハ

生徒並ニ有志ノ者聽聞ス  
每朝、素讀毎日、習字輪講會讀定日アリ

(註) 甲州「由學館」中「教則」の條

〔一八三二〕日本教育史資料 卷二十

一 芝間六畝歩

手習所一ヶ所

當村之儀極偏鄙不自由之土地ニ付村爲トシテ前書之通り手習所永續之儀山口鐵五郎様御支配之節五ヶ年以前天保六未年五月二日奉願上翌申年七月廿七日御下知被仰付御請印奉差上一同難有仕合奉存候然ル處申年大凶年國中騒立一件故翌酉年ヨリ右敷地開發仕去成年ヨリ普請ニ取掛リ今般普請出來ニ付假屋ヨリ引移手習相初候ニ付村内定書左ノ通

一 從御公儀様前々被仰出候御法度筋彌以堅相守御支配御代官様ヨリ被

- 仰付之儀聊モ不相背様可仕事
- 一 御代官様ヨリ今般六諭衍義大意前訓略御渡被成手習子供へ教候様可仕能覺候者ハ御譽可被成下候間出精教候様被仰渡手習所永續之基ト一同相勵可申事
- 一 手習所永續之儀全村爲之儀ニ付大小百姓一同御百姓相續相勵御年貢御上納筋專一ニ心懸可申事
- 一 御出役様モ時々可有之儀ニ付其旨相心得不作法無之様可致事
- 一 村役人時々見廻リ取締可申事
- 一 村内五人組一組限萬端世話人相定往々子供若者ニ至ル迄村爲ニ相成候様村役人不及申世話人ハ一同申合厚世話可仕事
- 一 遊歷人尋來候共止宿等一切相斷可申事
- 一 祝儀愁歎講事惣テ呼振舞等之儀是迄相定候通村役人ハ仲間限村方ハ五人組限ニ可仕事

- 一 惣テ質素儉約相用衣類等手織之外相用申間敷事
- 一 博奕賭之諸勝負等ハ不及申右ニ似寄候賭之諸勝負決テ仕間敷候萬一心得違之者有之村方へ不申出外ヨリ見聞候節ハ諸用入五人組割合ニ仕候筈前々定通急度相守可申事
- 一 手習所之儀ニ付普請諸入用ハ不及申師匠之者入用其外米金萬事は迄之通村入用等ニ一錢モ不差入奇特金ニテ引足不申候節ハ願人出金可仕儀ニ付萬一心得違ニテ右入用又ハ禮金杯ト取勸メ私欲ノ取計致候族有之候ハ、早々名主許へ可訴出事
- 一 手習所敷地芝間六畝歩外ニ申合芝間添地小物成場相添小物成御年貢米二升之儀ハ往々願人ヨリ上納仕候定ニテ敷地東三十四間西三十八間南三十間北二十七間ニ相定候上ハ往々故障ハ不及申聊タリトモ差支候儀無御座候事

右者御代官様厚御仁惠被仰出今般手習所普請出來手習相始全永續之基

ト難有萬端村爲之儀ニ付村中他村之者ニ不限一同厚世話致シ不實無之  
様仕御百姓相續相勵御國恩相辨御年貢御上納等專ニ心懸前書箇條一々  
承知仕大小百姓悅入村定連印仕候處相違無御座候

(註) 甲州「西野郷學校」中「手習所永續村定連印帳」

〔一八三三〕日本教育史資料  
卷九

郷學之差圖國學ヨリ仕師匠分ノ者モ國學ヨリ遣シ候筈ニ付應其望於國  
學從今日可令講習事

(註) 備前國「手習所」中寛文七年一月二十三日の達

〔一八三四〕日本教育史資料  
卷九

在々ニ手習所被仰付御趣意ハ去々年モ申聞通り前々ハ百姓共ノ子供寺  
へ通ヒ手習算用等習候由尤年長ケ候者モ旦那坊主之教ヲ受候様ニ有之

候處ニ近年ハ師匠仕坊主少ク罷成其上神職請ニ罷成候百姓共ハ子供ヲ  
寺へ遣シ候事難仕由年長ケ候者モ過半寺へ出入仕教ヲモ不請候由上ニ  
被聞召候然ル時ハ自今以後御領分ニテ育チ候民共ハ無筆無算又ハ人倫  
ノ示シヲ可請様モ無之段不便ニ被思召手習所ニテ手習算用仕習又ハ年  
長ケ候者モ間々ニハ心掛次第ニ講釋ノ一句ヲモ承リ人倫之教ヲモ請候  
様ニト思召テノ事ニ候縱令百姓共ノ子供手習算用稽古仕不得講釋ノ一  
句ヲモ聞得間敷キハ下ノ咎一國ノ上ニ被爲立候テハ其印ニハ御心ナク  
右ノ如ク被仰付ハ御國主ノ御役ト被思召テノ事ニ候又若百姓共ノ子供  
ノ内ニ手習算用致シ習四書小學ノ内ノ文義ヲモ辨へ人ニ生レテハ親へ  
ハ孝ヲ盡シ御國法ヲ不背一類和睦シ上ヲ重ンシ奉行代官庄屋等ノ申付  
ヲ用ヒ家職ノ耕作ヲ精ヲ出シ候筈ト心ヨリ合點仕候者後々一村ニ一人  
二人宛モ有之候ハ、在々ノ風俗ノ益ニ可成ト被思召テノ事ニ候上ヨリ  
ハ御國主ノ御役ト被思召被仰付事ニ候得共末々ノ身ニ仕候テハ寔猿同

然ノ百姓共ノ子供手習所ノ教ニヨリ一文字モ引算盤ヲモ覺若クハ其身器用ニテ文字讀ニテモ仕習候ハ難有事トハ不存候哉此段ハ不及申子供ヲ手習所へ出シ候親々ノ身ニテハ合點不參事ニ候前々ハ自分ニ造作ヲ仕手習算用習ハセ候ニ只今ハ從公儀夫々ノ師匠ヲ被仰付何ノ構モナク心掛次第ニ稽古仕ハ忝キ事ニ候末々之百姓ノ子供物ヲ書習算用仕文字讀ヲ致シ習候トテ上ノ利ノ御爲ニ成候事ハ少モ無之候得共右ニ申通御國主ノ御役ト被思召末々ノ事迄ヲ被掛御心右ノ如ク被仰付事ニ候得ハ末々ノ者モ此忝キ被仰付ヲ合點仕何卒上之御趣意相叶候様ニト存知農隙ノ時分ハ相勤可申候詰ル所ハ銘々爲ニ成ル事ニ候

(註) 備前國「手習所」中延寶元年の記録

〔一八三五〕日本教育史資料  
卷九

一在々手習所ノ教先手習算用此二色ニ仕度存候事

一文字讀ハ望申者計ニ教候様ニ仕度存候事  
一右ノ手習算用ノ師匠ハ前庄屋ヲ仕年寄罷只今隙ニテ居申者カ又ハ庄屋年寄ノ弟カ子カ無左共子供ヲ引廻可申ト思召候者ノ常差テ手自家業ヲ不勤者ヲ御見立半年替リカ一年替リ手習所へ詰サセ候様ニ仕度存候事

一文字讀ノ師匠ハ學校へ罷出申在々ノ子供ノ内ヲ望申所へハ替ル々々銘々ノ郡ニテ手習所ニ遣シ可申候尤其手習所ノ近所ニ四書小學ノ文字讀覺候者有之候へハ幸ノ事ニ存候  
一手習所へ出候子供ハ肝煎庄屋ノ子供並村々庄屋年寄又平百姓ニテモ手前宜下人モ召仕世忝一人手習所へ爲通候分ハ跡差テ事闕キ不申者ノ子供ヲ月十五日手習所へ爲詰申度右ノ者共ハ年長候得ハ皆公用ヲ勤ル者共ニテ御坐候左候得ハ物書算用不仕候テ不叶儀ニ御座候間此旨被仰聞望不申候共手習所へ御出シ可然存候尤年寄百姓ノ内小身ニ

テ子供手習所ニ出シ勝手迷惑仕ル者ハ無用ニ仕度候小百姓之内ニテ  
 モ手習所へ出シ度ト望候者ハ望次等ニ仕度存候事  
 一講釋之儀ハ民ノ隙ヲ考肝煎庄屋並村々庄屋年寄又ハ身ヲモ持候百姓  
 手習所へ寄セ一年ニ一度カ二度講釋望候者ハ望次等ニ仕度存候事  
 一講釋仕者ハ此方ヨリ在々へ廻シ可申事  
 一年々從公儀御米被下候分ニテハ末續キ申間敷候民之風印ヲ御急ナク  
 年久敷手習所ノ教續キ不申候テハ益御座有間敷ト存候左候得ハ民之  
 心ニ手習所ノ教好候様ニ何卒自然ニ被成掛ケ五七年過候ハ、御郡奉  
 行衆ノ御心得ニテ何卒民差テ迷惑不仕手習所一ヶ所ノ入用ハ子供ヲ  
 出シ候親々造作仕公儀之御構ヒ無之様ニ只今ヨリ御目論被成候様ニ  
 仕度存候此度被遣候御米ハ民共進ミ心出來申内計被下候様ニ仕度存  
 候事  
 一私存寄候趣ハ右之通ニ御座候得トモ遠方ノ儀其上民情不案内ニモ御

座候又ハ所ニ寄模様替リ可申候得ハ強テケ様ニ被仰付可然共不被存  
 候間右ノ趣御同心ノ御奉行ハ右ノ通可被仰付候思召寄モ有之御衆中  
 ハ入用米御請取被成今年ハ先御心儘ニ被成御覽可被成候其上ニテ  
 様子承又御相談可申候然共後々ハ從公儀御米不被下民共進ミ自分ト  
 シテ何卒手習所續キ候様ニトノ儀ハ御主意ニ御持被成縱去年迄御雇  
 ヒ被成候物讀當分又御雇ヒ被成候共後ニ從公儀御構ヒ無之時節片付  
 候儀只今ヨリ御了簡專一ニ存候

(註) 備前國「手習所」中學校奉行より郡奉行への照會の書

〔一八三六〕日本教育史資料  
 卷九

一郷費ハ教諭ヲムネトイタシ候へハ延方講談所ノ儀モ月次二度ノ會席  
 ハ學者ムキノ事ニイタサス郷里ノ子弟ヲ教諭イタシ候儀ヲ第一ト可  
 仕候

一 講讀ノ書モ小學近思錄朱子學的呂氏鄉約ナト子弟日用ノ心得ニモナルヘキモノヲ口演致度モノニ御座候四書ナト講釋イタシ候共字義ノ考索句意ノ判斷等ムツカシキ事ナク只一筋ニ注意ニモトツキ親切ヲツクシ人々心得ノ心得ニモ相成候様ニ可仕候ケ様イタシ候トテ子弟ノ心得改リ候事ニモ無之候ヘ共ナマシヒニ見識ラシキ講釋等取立候得ハ少年ノ心術高上ニ走リ又ハ灑落ノ風ニオチイリ流俗ヲ卑見候ヨリ却テ心術ヲ失ヒ候哉ニ御座候

一 講談所郷校ナト申儀邊土村里ニハ稀ナル事ユヘ人々心得モウスク講釋トイエハ只一筋ニ學者ニ仕立候テ講得サル書物ヲヨミ古キ事ナト覺エ候事ト存候ヨリ藝事ト相成リ心術ハウトクナリユキ候哉ニ御座候古ノ聖賢教諭ニ怠ラストテモ家ナミ人毎ニ學者ニ取立候事ニハ無之候ヲ當時ハ講釋トイエハ才藝ニホコリ農家ノ子弟ニマテモ學者ラシキ事ヲ教エ勸ムルヨウニ相成聊モ讀書イタシ候得ハ兎角見識ニホ

コリ候ユヘ却テ農商ノ家ノタメニハ無用ノヨウニ思ハレ身ヲ放ニナシ業ニ怠リ候資ト相心得候ヨリ自然ト出席ノ人モ無數無據村役等兼候主翁老人ナト御趣意ノタメニノミ出席イタスヤウニテ講釋モ詮ナキスカタニ成行申候畢竟寺僧ノ因縁談ハ老爺婆ノ聽聞スヘキコト、心得居候コトク郷校ノ講ヘハ少年輩ノ出席スヘキ事ト心得候ヨウニ仕度候然ルヲ只々御趣意ノミニ出席致候ヨウニテハ詮ナキ事ノヨウニ御座候

一 少年ヲ出席イタサセ候ニハシメノ程ハ穩便ノ教諭ハカリニテハスミ申間敷候古人モ懋テ導ト申サレ候ヘハハシメハ令條ヲ立出席ヲ駈促候ヨウニモ致候ハ、年月ヲカサネ候内ニハ出席ニモナレ一ツ二ツ聞覺候事モ有之一人二人ハ志ヲ起スモノモ出來自然ト出席モ懈怠ナク人數ノ減少モ無之御趣意ニモ相當可仕哉ニ御座候但少年輩ヲ出席イタサセ候ニハ令條ヲ立村ノ大小人別ノ多少ニ隨ヒ一村ヨリ或ハ十人

七人五人三人宛村役人差添誰兵衛忤誰何右衛門忤誰ト名前ヲ披露シ  
每席カハルカハル召連レ出候ハ、年ノ内ニハ平均三四席宛ノ出席ニ  
モ可相成候左ヨウ致候トテ中々令條ノ通りニ出席致候モノニモ無御  
座候得共只一通リノ觸流シニハマサリ可申候左ヨウ致候テ一年ノ出  
席ヲ相シラヘ出精不出精ニヨリ御郡方御廻村ツキテ講談所或ハ其村  
々ニオイテ御賞美御教諭等御直ニ被仰出候ヨウニモ致候ハ、大方出  
席モ平均ニ相成可申哉是ニハ御郡方ヨリ急度致候御觸出有之所謂御  
威光ニ無之候テハ行届申間敷候只講談所世話役ノモノヨリ一通リノ  
シラセ觸ハカリニテハ出席致候モノ、ミ罷出出席不勸ミノモノハ却  
テ出席ノモノヲ嘲弄致候スカタニモナリユキ愿慥出席ノ族モ世間ヲ  
憚リ候ヨウニテイヨイヨ御趣意ニ遠サカリ申候

一月次二度ノ講讀ノ外ニ三四日モ會日ヲ相立此日近隣ノ志アルモノヲ  
相集メ會讀講釋等イタサセ或ハ厚篤ノ遊歴生ナト參リ候節右連中ニ  
テ講筵ヲ催シソレソレニ才思ヲハケマシ一年ノ内ニ兩三度モ御奉行  
衆臨席被爲有習學ノ御シラヘ被仰付年月ヲカサネ才思成熟ノモノハ  
御見立ノウヘ追々月次ノ教諭ノ講釋ヲモ被仰付御賞美ノ御辭ヲモ戴  
キ候ハ、自然ト少年ノ勵ニモ相成可申候

一右ノ會席取立候ニハ好學ノモノ一兩人世話役相立社黨ヲ催シ切磋琢  
磨ノ功ヲ相ハケミ候様可仕候近來ハ諸生ノ風儀ヨロシカラス灑落ヲ  
學者ノ家風トイタシ候ユヘ節角ニ會讀等取立候テモ無用ノ見識ハナ  
シニナリ戲謔嘲笑却テ少年ノ風儀ヲ破リ候ユヘ農商老實ノ家ノ擯斥  
ヲウケ候事ト相成申候

潮來村宮本尙一郎殿ナトハ才氣モ有之行事モサワリナキ人ニテシカ  
モ其家ニ生レ候ヘハ講談所ノ一役ニ任シ會讀ノ世話等イタサセ好學  
ノ人ヲ駈立候ヨウ仕度候

一出席出入ノ刻限ヲ嚴重ニ相立正九ツ列席八ツ時退出トイタシ遠近ヲ



不論歸宅夜ニイラサルヨウニ可致候

右ノ様ニモ致候ハ、會席モ相續キ講釋モニキヤカニ相成自然ト人々ノ勵ニモ相成可申候只一人ノ講師ヲ立オキ一月二度キリノ講釋ノミニ候テハソノ人ノサシ合候事モ出來又ハ當日風雨ノ障リ等モ御座候ハ、闕席モ有之候ヘハイヨイヨ會日程遠ク相成所謂一日暴之十日寒之トカ申コトク只々御趣意ノタメノミニ出席致候様ニ成行候モ残念ノ事ニ御座候

(註) 常陸國「延方郷校」の條

〔一八三七〕日本教育史資料 卷六

孝經四書五經日記故事小學國史略日本外史十八史略等素讀ハ毎朝五ツ時ヨリ九時マテトシ講義ハ總テ午后トス又夜學ノ課ヲ設ケ農民ノ便ヲ以テ教授ス

休日ハ朔日十五日五節句氏神祭日

(註) 高梁藩後成章村校「教則」の條

〔一八三八〕日本教育史資料 卷六

漢學ヲ主トシテ傍ラ算法筆道ヲ授ク學習ノ年限ナシ試験ハ毎年一度藩學有終館ニ於テ素讀講義等ノ試験アリ又臨時藩學會頭巡回試験シ優等ノ者ヘハ袴着用ヲ許サレ或ハ書籍等ヲ賞與セラル

(註) 高梁藩後成章村校「學科學規試驗法及諸則」の條

〔一八三九〕日本教育史資料 卷六

卒ノ子弟ハ三拾五名内十名ハ講義生餘ハ素讀生平民ノ子弟ハ三拾名盡ク素讀生

(註) 高梁藩後成章村校「生徒概數」の條

〔一八四〇〕日本教育史資料 卷一

存廢ハ藩廳專ラ之ニ干涉シ敢テ人民ノ自恣ニ任スルコトナシ、教科用書ハ各地ノ適宜トシ或ハ算術ヲ兼テ授ケシム、教員ハ藩士ノ中其任ニ堪ユルモノヲ撰ミ之ニ兼務セシム且ツ學校在勤中ト雖其職名ヲ帶ヒテ地方學校ニ勤務スルニ止マルヲ以別段俸録ヲ與フル等ノコトナシ、經費ハ藩廳人民ヲ勸獎シテ寄附捐金セシメ舊庄屋等ヲ世話掛トシ舊社寺地又ハ新開地及伊勢講田略等ノ全部又ハ幾部ノ作益米ヲ以テ雜費ニ充テ或ハ各戸ニ醸出セシム、建物ハ舊社寺ノ別當ヲ廢セシニ依リ此家屋ヲ以テ之ニ充テ或ハ適當ノ家ヲ借入セシメ或ハ醸金新築セシメシ等一様ナラス、其他教則學規試驗ノ方法等全タカラス

(註) 三田藩「郷市學校概制」の條

〔一八四一〕日本教育史資料 卷八

天保十年佐賀市中勢屯岸川町ニ學校ヲ設立シ平民子弟ノ學問所トス教導所ト稱ス其後分校數ヶ所トナル此比松浦郡有田町伊万里町ヘモ同様ノ建設アリ

(註) 佐賀藩「平民ノ子弟教育方法」の條

〔一八四二〕日本教育史資料 卷六

郷校ノ事 右宰判毎ニ一ヶ所宛勘場近邊或ハ最寄ノ地エ可被差立追テ建調ヲモ可被仰付候得共其内御茶屋或ハ有懸リ稽古場或ハ寺院等御借揚ニテモ可被仰付所柄見立可申出尤御仕渡ノ儀ハ別紙ノ通可被仰付諸事明倫館管轄ニ被仰付候事但郷校諸世話ノ儀ハ御代官所捌ニ被仰付候且又於地下諸士其外豪農町ノ者學校建調奉願候得ハ後年修覆ノ儀ハ御惱可被仰付候事

(註) 山口藩「學事上ノ諸制度」中慶應三年四月廿四日「伺指令」の一節

〔一八四三〕日本教育史資料  
卷十

本所ハ慶應三年金澤市民有志者ノ協議ニ依リ金澤卯辰山ニ於テ創立シ  
漢學數學習字ノ三科ヲ設ケ市民ノ子弟ヲ教授ス其費用ハ市民ノ支辨ス  
ル所タリ明治三年十一月金澤各所ニ小學所設立ノ際本所ヲ卯辰山小學  
所ト改稱セシメ小學生徒ノ塾所トナス

(註) 加賀藩「舊藩立學校沿革概略」中「集學所」の條

〔一八四四〕日本教育史資料  
卷四

郷校教導之儀孝悌之道ヲ修メ農桑之業出精相勤候テ往々禮讓之風ニ推  
移候様示諭可致候万一空論ニ耽リ過高之事申唱本業主職打忘候様成行  
候テハ後日流弊有之ニ付別紙郷約相渡候間毎月一統相集御趣意之趣厚  
可申渡旨被仰出候

〔別紙〕敦孝悌以重人倫篤宗族以昭雍睦和郷黨以息爭訟重農桑以足衣食

尙節儉以惜財用講法律以儆愚頑明禮讓以厚風俗務本業以定民志訓子  
弟以禁非爲息誣告以全善良誠窩逃以免株連完錢糧以省催科聯保甲以  
弭盜賊解讐忿以重身命  
右十四則處己待人之要也汝諸父老及子弟宜每月旦會集于校而詳講恪  
守而終身勿忘焉

(註) 福井藩「平民ノ子弟教育方法」の條、安政四年二月十三日、「御用番ヨリ明道館幹事橋本左内エ」の達

〔一八四五〕日本教育史資料  
卷四

松岡八町之儀近來追々風俗猥ニ相成候ニ付何卒學問所等相建産業之餘  
力學問心懸候ハ、自ラ禮讓モ厚相成可申ト存候且又孝山浩齋ト申者近  
來醫業片手ニ子供ヘ手習素讀教來候處教導方行届追々入門之子供モ大  
勢ニ相成及成長候者モ有之候ニ付學問所等相端立度トハ八町之内申談  
居候折柄御内御移モ有之ニ付此度本町明屋敷へ家居壹軒相立學問所ニ

仕度候間何卒御慈評ヲ以御上様ヨリ教導師月々何日ト御定御仕向被下置候様右願之通被仰付下置候ハ、生々世々難有仕合ニ奉存候

(註) 福井藩「平民ノ子弟教育方法」の條、安政四年四月、松岡郷學校設立願書

〔一八四六〕日本教育史資料 卷二

御百姓共一同古來稀成昇平の御代に生れ比屋安穩に妻子を育ひ鼓腹の樂みを極候段今更難有抔奉申上候も愚成候事に御座候然所世之諺に樂み居て樂を不知習に御座候て良も仕候へは斯迄難有御國恩をも忘却仕隨て奢侈僭上の氣前より耕耘の要務に張込薄く唯目前の名利に走り古人の教訓向等は片端をも不相究凡道と申せは佛道より外は無之様に相心得<sup>○中</sup>就夫先年細井甚三郎様御勤御廻村御講釋被成下候儀に御座候處何となく當時は御中絶に相成候段乍憚遺憾至極奉存候念此節右等の御再興被成下御支配御役人様御禁戒の上にも猶明倫堂御教授様方時々

御廻村或は五村或は十村の男女共寺社等の手廣き場所へ御呼集被成下貧富の無差別唯長幼の次席を以て神妙に座え候様被仰付第一神君の高き御事より御國恩の廣大にて御仁政の難有御事共を初行狀に於ては銘々質素を守孝悌を勵み農事を勤餘業に不流様俗談平話を以耳近く御教諭被成下年月不息拜聞仕候様にも相成候は、御蔭を以自然と舊弊一變仕一同淳厚の風俗に移さるから御政事筋御苦勞薄にも相成可申哉と恐をも不顧此段奉願上候

(註) 名古屋藩明倫堂「沿革要略」の條、天保六年閏四月、庄屋より代官宛の願書

〔一八四七〕脩正舎記録

一 宣教館教授之儒家人體を撰、万事先輩之指揮に可隨、勿論朱學を專致尊崇、心學道話之外異流之學者、講師に致問敷事、

一 世話方並永續積金之面々、志令堅固且身柄を糺し、猥り成者乞加入すべ